



TITLE:

# 張溥とその時代：明末における一郷紳の生涯

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

---

CITATION:

宮崎, 市定. 張溥とその時代：明末における一郷紳の生涯. 東洋史研究  
1974, 33(3): 323-369

ISSUE DATE:

1974-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153561>

RIGHT:

# 東洋史研究

第三十三卷第三號 昭和四十九年十二月 發行

## 張溥とその時代

—— 明末における一郷紳の生涯 ——

宮 崎 市 定

### 目 次

- 一 郷紳とは何か
- 二 東林から復社へ
- 三 張溥の登場
- 四 復社の活動とその基盤
- 五 絶望の時代
- 六 政争渦中の復社
- 七 張溥の人物

### 一 郷紳とは何か

長い中國の歴史を見渡すと、普通には專政政體と稱せられ、或いは獨裁政治とよばれる權力の抑壓の下に、民衆は只屈

服か反亂かの二途しかなかったかと思われるかも知れないが、實はそうでなく、そこには輿論もあり、政黨もあり、政治運動もあり、反權力闘争もあった。ただ中國においては、當然のことながら近代西洋社會におけるそれらの動きとは、全く異った形態をとって行われざるを得なかった。そして中國における政治運動も、また當然のことながら、時代に應じてその形態が變つてきている。それはその時々々の社會狀態に對應するものであった當然の歸結である。これを明代についてみると、明末の東林運動や、復社の運動は何よりもよく當時の社會狀態に密着して行われたものであった。それだけ歴史學の研究題目として興味もあり、有益でもあると言えよう。

この二つの政治運動において中心的な役割を果たしたのは、郷紳なるものの存在である。郷紳とは讀んで字の如く、在郷の搢紳、すなわち地方在住の知識階級にして官位を持ち、同時に大地主、又は資産家を兼ねたものであるが、この階層が社會に及ぼす作用は三つの面に要約することができる。第一は郷曲に武斷することであり、これは土地の弱小民衆の上に權力又は財力を以て影響を及ぼし、意のままに動かす作用を言う。ここで注意しなければならぬのは、この作用は必ずしも常に地方民衆を抑壓するとは限らず、時には民衆の希望を代辯する場合もあったのである。第二は官政を把持することであり、郷紳はその實力によって、地方官廳の政治に壓力を加え、政治方針に干渉したり、その實施に異議を唱えたりすることがあった。これもその結果がいつも害毒を地方に流すとは限りは限ったわけではない。ずいぶん、弱きを助け強きを挫くといった義俠的な行動もあったのである。

第三には更に進んで遙執朝柄、遠方に居ながら中央政府の方針を動かすに至るが、これはどんなことであろうか。この言葉は、先には東林の際に、後には復社の張溥の場合にも用いられている。東林については、明の蔣平階の『東林始末』萬曆三十九年五月の條に、給事中朱一桂、御史徐兆魁の疏を載せ、その中で

顧憲成は東林に學を講じ、遙に朝政を執る。

と言ひ、張溥については、「明史」卷二百八十八の彼の傳に、刑部侍郎蔡奕琛が、獄中から、

溥は遙かに朝柄を握る。己が罪は溥に由る。

云云と申立てたことを記し、『東林始末』崇禎十四年六月の條には、同じ蔡奕琛の言葉を、

一里居の庶常にして、黨を結び權を招き、陰に黜陟の柄を握る。

と言いかえている。一里居の庶常は即ち一郷紳に外ならない。<sup>⑩</sup>

郷紳が郷曲に武斷し、地方政治に容喙することまでは、當然ありそうなこととして理解できる。併し朝廷の政治までも動かすことは本當に可能だったのであろうか。特に張溥の場合は、その運動によって、前大學士の周延儒を再びその位の復活させたと稱せられる。もしこのような事が、そのまま事實であつたなら、そもそもこんな事を可能ならしめた明末の社會を動かすメカニズムの正體は何であつたか。これは私が従前から抱いていた疑問であり、本編は自らこの問いに答えようとする試案なのである。

史料は主として、中國内亂外禍歴史叢書の「東林始末」に收むるところの、蔣平階の『東林始末』、吳偉業の『復社紀事』、眉史（陸世儀）氏の『復社紀略』、及び『崇禎實錄』、『明史』、谷應泰の『明史紀事本末』、『明紀全載輯略』等により、特に『復社紀略』を用いることが多かった。出處を記さないものは概ね同書による。ほぼ年代順に記録しているから、檢索に難くない。ただ本書は完結していないものの如くである。『明紀全載輯略』は正しくは、『通鑑全載』の一部を占める「明紀」で、卷四十から始まり、卷五十五に至る。朱青巖の著で、卷頭に康熙三十五年禮部尙書張英の序がある。

## 二 東林から復社へ

東林についてその詳細を論ずることは、今はその暇もないし、またこの小論の目的とする所でもない。併し東林はここに問題としようとする復社を理解するため、いきおい論及せざるを得なくなるほど深い關聯を持った先行事件であるから、必要最小限度にその性質の二、三の點に一瞥を與えておこうと思う。

その第一は東林の起原が普通に萬曆二十一年（一五九三年）の京察と、これに續く翌年の廷推にあるとされている點である。京察、すなわち京官考察は六年毎に行われる中央政府官吏に對する勤務評定であり、この年の京察において吏部では、宰相たる内閣大學士の側近者に悉く落第點をつけて物議をかもした吏部尙書孫鑰、考功郎中趙南星が責任をとって罷めさせられた。實はこの原案は吏部文選郎の顧憲成の意見によるところが多かったので、彼は同時に罷められんことを請うたが取上げられなかった。

その翌年に廷推が行われた。廷推とは内閣大學士を任命する際に、吏部が三品以上の官を會同して評議し、候補者數名の名を列して奏上し、天子の裁斷を請うことを言うが、併し時には天子が廷推を用いないで、特旨を下して任命することもあった。この年に吏部から推薦した候補者は天子の意向に反したため譴責を受け、尙書が罷免せられたので、文選郎中の顧憲成が上疏して辯護し、更に天子の怒りに觸れて追放（削籍）處分を蒙った。これが東林運動の出發點と見做される。

顧憲成は蘇州に近い常州無錫縣の人であり、そこには宋代に楊時の建てた東林書院があったので、彼はその弟の允成、及び同志を集めて東林書院を復興し、その講學の處とした。併しそれは單なる經書の學問でなく、時政を諷議し、人物を裁量することが多かったので、天下これに附和する者が多く、書院は在野輿論の中心を成す觀があった。故に純粹な東林黨は、この書院に講學する顧氏兄弟、及び高攀龍、黃尊素等を指すに過ぎないが、廣義に言う時は、凡そ東林の意見に同調し、特に宦官魏忠賢及びその黨派に對抗した廣汎な官僚士大夫群を凡てこの名の下に總稱することがある。そして彼等の果敢な闘争にも拘わらず、熹宗の天啓六年（一六二六年）に至って、一網打盡に逮捕處刑され、潰滅的な打撃を受けて終るのである。

中國史上における政争は、政策よりも、むしろ人事が中心となっているが、明代において特に然りとする。東林黨もその例に洩れず、萬曆二十一、二年の考察、廷推から始まり、中間萬曆三十九年、辛亥の歳の京察で、他の黨派との間に大衝突を起し、天啓初年には大いに黨勢を擴張するようになったが、此において反對黨は宦官魏忠賢と結んで東林派に對し

反撃を試みるに至った。この際に論争の主題となったのは、いわゆる三案であるが、今日から見れば、これは殆んど政策として取るに足らぬ瑣末事であり、實はここに東林派の政治家としての弱點が潜んでいたのであった。結局は實力と實力との對決となり、天子を挟んだ魏忠賢の權力に壓倒されて、東林黨は潰滅するに至るのである。

中國古來の政治方針は、人を得るに勞して人に任ずるに逸す、という主義で、人事の進退が政治の中心問題となる。これは古代の小規模な都市國家程度の集團においては適當な方法であつたであろうが、大規模な天下國家となりきつた歷代王朝の下では既に時代遅れの様式となつた筈である。それにも拘わらず、宰相は人事に追われ、六部の中では特に吏部が別格とされて權勢を振うという傳統が固守された所に、中國政治が近代化されなかつた原因が潜んでいたのであった。以上のことから、東林は政治上における派閥に外ならなかつたと言える。

東林黨において注意さるべき第二は、その成員が、歴としたエリート官僚であつた點にある。宦官魏忠賢が權力を掌握した際、その反對者を悉く東林黨人と稱して名簿を造らせたが、ずっと以前に死んだ顧憲成の外は、李三才、王圖、趙南星、孫丕揚、鄒元標など、何れも大臣級の人物であつた。併し彼等は黨人とは名付けられたが、實際には黨らしい組織は何も持つていなかった。それは當時においては、官僚は飽迄も天子個人と直結すべきもので、横の連絡をとつてはならぬものとし、黨を組織することはもちろん、黨派的行動に出ることすらも嚴禁されていたからである。故に魏忠賢が彼等を黨人と名付けることだけで、すでにそれが罪人であることを意味したのであつた。従つて東林黨には中心となるべき人物が存在しない。これに反し敵方の首領魏忠賢は天子の信任を得てその名の下に百官を頭使し、祕密警察を握つて、彈壓を加えてきたのであるから、これに對して東林黨は抵抗すべき術がなかつたのである。

後世から見れば東林黨の政治活動は、これと言う政策も持たず、單なる情緒的な悲愴感で宦官の專横に立向つたのであるから、その勇氣、その正義感には敬意を抱きつつも、その根底には言いようのない空虚感が漾うのを如何ともしがたい。事實、當時の冷靜なる第三者からは、東林黨にも多大の缺陷があつたことが指摘され、魏忠賢方のいわゆる閹黨と並

べて東林黨をも同罪とし、喧嘩兩成敗を唱える意見も強かったのである。

崇禎帝は即位すると間もなく、魏忠賢、その黨崔呈秀を誅したが、その後でも吏科都給事中の陳爾翼は上言して、東林の餘孽がなお國都に偏布しているので、これを嚴緝せんことを請うたとあり、また倪元璐の上言によれば、凡そ崔・魏を攻むる者は、併せて東林を呼んで邪黨と爲すのが常であつたと言う。そしてまた事實、魏忠賢によって毀たれた講學の書院は、その復興を請う者があつたが取上げられず、そのままに放置されていたのである。

この東林を嗣ぐ者が即ち張溥らの復社であり、世に小東林と稱せられたとある。然らばその復社とはそもそも如何なるものであつたであらうか。

### 三 張溥の登場

張溥、字は天如、蘇州府太倉州の人で、萬曆三十年（一六〇二年）に生れ、崇禎十四年（一六四一年）に死んだ。父は翊之と言ひ、太學生たるに止まつた。溥は兄弟九人あつたが、婢の出であつたため、親族からも禮を以て遇せられなかつたと言う。このような境遇から生じたコンプレックスが、彼の性格に決定的な影響を及ぼした。良い方では、これに發憤して、幼より刻苦、學に勵み、書を讀むに従つて手抄し、右手の筆を握るに當る部分がタコを成したほどであつたが、悪い方ではコンプレックスの裏返しとして、權力慾、名譽慾が熾烈であつた點が見逃せない。

この頃、江南を中心として天下に文社なるものの結成が流行した。それが大いに流行するに至つたのは、書院に對する彈壓のあと、これに代る役目を果す爲であつたが、併し書院と文社との間には非常に大きな相違があることを知らねばならない。

そもそも書院は私立學校の如きものであるが、五代に始まり、宋代に流行し、明代では特に陽明學の影響を受けて盛大に行われるようになった。その主たる目的は儒敎の宗旨を闡明し、相携えて道德の實踐に勵む場を造るにあつた。然るに

文社はその名の示す如く、専ら文學を討論し、文章の才能を鍊磨するための同志の集會であつた。しかも當時のいわゆる文章は、特殊な用途をもち、科擧に通過するための制藝と稱せられる一種格別な文章を言うのであつた。當時名文家と稱せられる者は、科擧に必要な模範答案を制作して、これを受験生の間に擴めるを業とし、その時流に投じた者は大藝術家として世上の尊敬を集めた。これは一見不思議な現象のようであるが、知識階級の最大關心事が科擧にある時、人生にとって最も必要な文章は、いわゆる制藝に外ならなかつた。その他の文章はいわば裝飾用の死文であつたが、制藝こそは生命力をもつて活きた文章であつたのである。後世から考えると、制藝の中に眞の文藝を認めるのは、そもそも無理な態度であり、事實清朝時代に入ると、科擧のための學問は言わば必要惡としてその存在を認め、青年時代には心ならずも科擧向きの受験勉強に勤めるが、及第後になつて始めて眞に價値ある學問に着手するようになる。併し明代には科擧に及第してしまえば其後には、清朝の考證學の如き、精魂を傾けるに足るような學問對象がなく、學問も作文もそのまま停滯してしまふことが多かつた。文筆活動は科擧及第以前が花であつたのである。

張溥の少年時代の勉強も、この種のものに外ならなかつた。併し科擧のための文章と言っても、そこに新意を出そうとすれば、それなりの苦心が要る。學問は廣いほどよく、經史子集に通ずるを要する。併しそれを文章に用いる段になると、選擇が肝要だ。當時蘇州を中心とする學界においては、嘗て祝允明が唱えた古學復興が次第に強い流れとなつて現われてきた。經學は古注疏、史學は通鑑綱目を去つて十九史、已むを得なければ紀事本末、文體は唐宋を遡つた漢魏六朝というのが、張溥の到達した結論であつたらしい。そして彼を古文に導いたのは、鎮江の周介生（鐘）であつたと言ふ。

當時制藝の大家として江西撫州出身の四人の名が天下に轟いていた。陳際泰（大士）、艾南英（千子）、章世純（大力）、羅萬藻（文止）がこれで、併せて陳文章羅と稱せられた。ところでこのように文章を以て世上に名ある者が、そのまま實力を認められて華々しい科擧の成功者であつたかと言えば、不思議にそうではない。四人のうち文章羅の三人は漸くにして鄉試に及第して擧人となつたが、陳際泰はその鄉試にもいつも失敗して長く生員の身分に止まつていた。科擧というも



のは眞の學力や文才よりも、むしろ偶然の運に左右されることが多いのは古今を通じて變らぬ原則であつた。陳際泰はその文章を學んで科擧に及第して高官になった人が幾十百人あつたか知らぬ間に、本人は一向に芽がふかず、漸く崇禎七年甲戌の歳の會試に、考官文震孟の力によって及第し、引續き殿試を受けて進士になることができたが、齡已に六十八歳であつた。

張溥が兄事した周介生もまた同じ運命に弄ばれた。彼は非常に早熟な秀才で、角卯時五車萬卷、幼童の時に既に五車に滿つる萬卷の書を讀破したと稱せられた。彼が新體の文章を唱え、應社を組織し、陳子龍、夏允彝、吳昌時、楊廷樞等をその傘下に收めると、天下が翕然として靡ぎ、これまで覇を稱していた陳際泰への追隨者が改めて應社に名を列ねるに至つた。然るに介生本人は何時までもうだつが上らず、漸くのことで進士となつたのは明滅亡の前年、崇禎十六年のことであつた。

そういえば張溥の前半生もまた同じような運命を辿つたらしく思われる。彼は博學で通ぜざるなく、詩文に敏捷で、四方から注文を受けることが多かったが、嘗て下書きしたことなく、來客の目前で直ちに筆を下し、立刻に成就した。同郷で六歳年長の張采（受洗）と意氣投合し、婁東の二張と稱せられた。

張溥が何歳で童試に及第して生員となつたか明かでない。併し何回となく鄉試に落第して志を得なかつたことは事實である。そして崇禎元年、新天子即位の慶賀の意味を以て、天下の學校生員の中から恩貢生を國子監に入學させた時、二十七歳の張溥が、恐らく太倉州學から選ばれて北京に上つたが、これは少しく異様な感じを受ける。貢生なる者は多くは在學年數の長い、老生員を充てることが普通なのであつて、二十七歳ではまだ少し早すぎるようである。そこで私は事によると張溥の年齡は十歳ぐらいの齠髫がよんであつたのではないかという氣がする。こんな疑いを抱く理由は外にもあるのだ、前述の張采は彼よりも六歳も年長でありながら、溥の方では少しもこれに對して氣兼ねする風が見えない。一方、吳偉業（梅村）は張溥の門人と稱するが、年が七歳しか違つていない。どうも不釣合である。また張溥の著書は數百卷、

或いは三千餘卷に達したというが、その大部分は編纂物であつたとしても、數え年四十歳で亡くなつたにしては、あまりにも多過ぎる感じ無しとしない。<sup>⑧</sup>

とまれ張溥は恩貢生として北京に出て太學生となり、試験を受けて高等に入り、諸貢士が争つて交際を求めたばかりでなく、天下の名卿碩儒にして魏忠賢に追われ、崇禎新政によつて北京に召喚された者も、争つて節を折り交を訂し、招待やら宴會やらで、日もこれ足らなかつた程で、その名が京師に満ちたという。これも事實が本當にそのようであれば、二十七歳、白面の書生にしては出來すぎた話のように思われる。

張溥が恩貢生として北京に上つた際、主唱して文會を催し、成均大會と稱せられる。これは恰も今日の句會のように、出席者が各自自作の文を持ちよつて討論品隲し、後にその文を集め、文集として刊刻して世に擴めたのである。

翌崇禎二年、蘇州吳江縣の知事、熊開元（魚山）は張溥を迎えて客とし、縣の富豪の吳氏、沈氏がその子弟を入門させ、張溥を盟主として尹山大會なるものを開催させた。附近の名士が悉く集り、盛會であつたので、彼の名聲が益々高くなり、遠く湖北、安徽、河南、浙東から訪ねて來る者が相つぎ、陝西、山西、福建、廣東など遠隔の地の人は、その文を郵送して教を請う者が多かつた。

崇禎三年庚午の歳は三年に一度と定められた郷試の行われる年であり、南直隸の生員は殆んど凡てが南京に集つて、貢院で競争激烈な試験を受けた。張溥はじめ應社の生員が多く優秀な成績で及第した。この機會に張溥が重ねて主催者となつて金陵大會を開催した。

#### 四 復社の活動とその基盤

崇禎四年辛未の歳は、會試、殿試の行われる年に當り、新舉人の張溥は北京に赴いてこの試験を受けて無事通過した。周介生らの應社などの文社の結成、及び張溥らの大會の開催は、單に文章を討論し、交際を定める爲ばかりではなく、實

はこのようにして當局者に對して示威を行ない、威壓を加える目的を持っていた。そして民間にこのような組織が生じ、人物文章の月旦が行われて輿論がそれを認めるようになる、當路者もこれを無視することができなくなってきた。

當路者の中にはこのような動きを苦々しく思う者もある一方、この新興の勢力を利用しようとする者も出てくる。すなわち輿論が定めて學者文章家と折紙つけた名士を試験の際に通過せしめて、これを自己の門生とすれば、單に輿論の賞賛を博するばかりでなく、自己の政治上の立場を強化するに役立つからである。有能な若手政治家を敵とすると味方とするのでは、將來の政治活動の上に決定的な利害を齎すことになる。そこで朝廷の大臣が文社の輿論に迎合する風が強くなってきた。

當時の朝廷で首席の内閣大學士は周延儒であり、次席は溫體仁であった。天下の膝元の北京で行われる會試には、事の重要性に鑑みて、大臣が主考官にならねばならないが、但し首席大臣は多忙なので、多く次席大臣を以て充てるのが通例となっていた。然るに周延儒はこの時、士子の人望を収めることの得策なるを思い、溫體仁の意向を無視して、自ら總裁となつて會試を主宰した。彼は配下の考官に命じて、特に意を用いて張溥らの知名の士を拔擢せしめたのである。もっとも答案はすべて糊名、謄録してあり、何人も答案の番號以外を知ることができず、しかも考官は答案の寫しを手にするだけなので、筆跡による鑑別も不可能である。ただ一つの手掛りはその文章である。ところで張溥らの文章は甚だ廣く行き渡っている、考官等が少し注意深く讀めば、たとい個人個人を適確に言いあてることが出来なくても、そのグループの主要部分を網で掬いあげることができるのである。こうして此年の會試では、首席の會元に當つたのが吳偉業であり、張溥はその師でありながら、成績は反つて下つたが、兎も角も及第することができた。この外の名士としては、夏曰瑚、管正業、周之夔などが及第しており、座主の周延儒は斯くして、居ながらにして多數の新鋭をその門生に加えることができたのであった。

このような經過は、清代の科擧事情に比べると甚だ異様に感ぜられる。というのは、清代の試験官はもっと權威があ

り、受験生はひたすらその學風文體を研究し、それを眞似て通過を計るのが普通であつたからである。明末には逆に、試官が答案を審査する際に、答案の文體によつて作成者を推察し、名士を選抜して誇りとする風があつた。この風は別に周延儒に始まつたわけでなく、既に東林諸人の時から行われていた。例えば黄煜の『碧血錄』に收むるところ、魏大中「魏廓園先生自譜」の萬曆三十一年、二十九歳の條に、

時に競う者は日に名紳の門に奔走して自ら嚮ぎ、名紳も亦た復た文字を假りて以て名生を收む。〔我れ〕心に之を醜とす。故に〔中略〕郷試に售れず。

という状態であつた。

會試に通過すれば、次の殿試には原則として落第者を出さぬので、及第して進士となるに大きな障害はない。ただその成績が問題であるが、此際にも吳偉業は成績拔群で第二人の榜眼に當り、張溥の方は單なる優秀で、翰林院に留めて庶吉士に任ぜられたに止まつた。ところが張溥は庶吉士とはなつたものの、此はもともと翰林官となるための見習生にすぎぬので、自信のありすぎる彼は上司先輩に對して恭順であることができない。殊に内閣大學士溫體仁と衝突し、翌年親の喪のために休暇を請うて歸郷したまま、再び歸任する意志なく、文字通り郷紳の生活を送ることとなつた。

翌崇禎六年癸酉の春、張溥は四度目の文會を催して虎邱大會と稱せられる。當時周介生を領袖とする應社のような結社が各地にあり、江北の匡社、松江の幾社、浙西の莊社などが最も有名であつたが、彼は此等の諸社を糾合して統一的な文社運動を起そうとしたのである。期に先んじて傳單を四方に飛ばせると、山左、江右、晉、楚、閩、浙の各地から、舟車を以て至る者數千餘人あり、會場にあてられた虎邱山上の雲巖寺の本堂、大雄寶殿には收容しきれず、生公臺、千人石などの上にも人が鈴なりになるほどの盛況であつた。

この集會において、總合結社の名を復社と定めたが、これは興復古學の意味である。また社規を設けて違背せざること

巧言もて政を亂す毋れ。干進して身を辱むる毋れ。

の語がある。文字通りに解すれば、政治に容喙したり、獵官運動してはならぬ、ということになる。本來、復社の目的は單に相共に文學の道を研鑽するにあつたのである。但し社是として古學の復興を唱えている以上、文學の研究と言っても漫然として無制限なのではなく、一定の規準と範圍とが設けられ、そこから逸脱することが禁ぜられる。そして更にこの古學を推進するのが目的となつた以上、この方針に反する對立者を排除して行かざるを得ない。とすれば復社運動は勢いとして、政治運動に走らざるを得ないのは當初から十分豫見されていたのではなかったか。

復社が東林と異るのは、その成員が多く下級の郷紳か、又はまだ科擧に及第しない生員層であつたことである。東林が大臣級をも含む中堅官僚層を抱えていたのに比べると、この點では大いに見劣りがするように思えるが、實は決してそうではなかった。それは東林は名ある官僚であつたが爲に、法規によつて黨を造り、又は黨に類似する行爲に出ることを嚴禁されたのに對し、復社は文章研究の名の下に公然と社を結び、統一ある行動をとることが出来たからである。復社は張溥を盟主として、従つて太倉州が本部であり、社長四人あつて彼を輔け、各地の府縣には一名ずつ社長があつて、糾彈、要約、往來、傳置を司つたとあるから、規約違反者の處罰、命令の傳達實施、人物の往來、文書の配達などの職務を行ない、恰も一個の有機體としての活動を展開することができるような組織を具えていたのであつた。

虎邱大會の後、張溥は社中から募つた文章を集め、『國表集』なる文集を編したが、作者は七百餘人、文章は二千五百餘首に上り、國初以來始めて見る盛事と稱せられた。

復社が文章を以て目的とする以上、先ず實行せねばならぬのは、社中の名家でまだ科擧に及第せぬ者の救済である。實はこれまでも何回か企てた大會は、やはり同志の受験に對する應援、試験官に對する無言の威壓であつたわけであるが、復社結成後はその勢力を背景として一層露骨な干渉を試みるようになった。眉史氏（陸世儀）の『復社紀略』卷二に載せる次の佚事は、この間の事情を最も活き活きと描寫する。

文湛持（震孟）が將に赴職せんとするの時、群紳は徐九一（汧）の止水（亭）に飲餞す。天如（張溥）、湛持に謂いて曰く、「明年（崇禎七年）の會試の考官には、公必ず壓簾（正考官）とならん。今海内の舉子、會元となるに愧じざる者は、惟だ陳大士（際泰）、暨び楊維斗（廷樞）の二人のみ。幸いに意を留めよ。」湛持曰く「天下の人、大士の文を讀みて魏科を取る者、凡そ幾くなるを知らず。而して大士久しく困しむ。吾れ此の番、當に之を夾袋中に收めん」と。天如、轉じて項水心（煜）に語りて曰く、「然らば則ち維斗は乃ち公の責なり」と。水心も亦た首肯す。天如又た言う、「吳巒雉（鍾繼）は久しく海内の師範たり。此の番、之をして釋褐せしめざるべからず」と。兩人唯々たり。聞に入る比おい、湛持壓簾たり。覺めて大士の卷を得、袖にして水心に示して曰く、「昔は老社長（大先輩）たり、今は〔我が〕老門生と作る」と。水心は狡なり。會元が己の房（受持ち）より出んことを欲す。乃ち一卷を持し湛持に示して曰く「已に維斗の卷を得たり。大士と維斗と、吾が黨との交情に少しも軒輊するなし。但だ天下に冠冕たらしむるに、其の鄰省（江西）たらんよりは、寧ろ吾が郷（蘇州）たるなからんや」と。湛持乃ち卷を持し細閲して曰く、「誠に維斗たらば、何ぞ譲らざるを得ん。脱し維斗に非ざりせば奈何せん。」水心曰く、「今場屋中、誰か能く此等の文を作る者ぞ。若し維斗に非ざりせば、當に吾が眼を抉りて之を國門に懸けん。」湛持その眞懇なるを見て、遂に之を許す。舊例として會元は必ず壓卷（名文章）に譲る。填卷（成績記入）すること末後にあり。時に主司、項の卷を注視するに、湛持は反つて遜謝をなし、己の卷（大士の答案）を出して先ず填し、項の卷（維斗らしき答案）に冠軍（首席）を譲る。拆卷（姓名の封を破る）に及べば、乃ち李青なるものなり。湛持悲ること甚し。然れども已に之を如何ともするなし。煜（水心）纏りて罪を負う。湛持色を正しくして曰く、「此の舉は大士に負くのみならず、併せて張天如に負けり」と。榜發す。鍾繼も亦た中式せり。同簾（同考官）の薛國觀、出て（溫）體仁に告ぐならく、「其の國表（集）の姓氏を以て查對するに、中式の者は多く復社より出ずるを見たり」と。

以上は僅にその一端を示すに止まる。復社はあらゆる機會に、その社中の試験及第の便を計つて運動を試みた。そして

それが極めて有効であることが知られると、天下の士子は争って入社を願ひ、財ある者は惜しまずに財を提供したので、復社の勢力はいよいよ伸張してその運動を有効ならしめるという循環作用が始まったのである。このことを『復社紀略』に記して、

遠近謂えらく、士子は天如の門に出ずる者は必ず速く售る、と。大江南北、争って以て然りと爲す。〔中略〕復社の聲氣、天下に徧ねく、俱に兩張（溥・采）を以て宗と爲す。四方の稱謂、敢て以て字せず。天如を西張と曰う。居るところ西に近ければなり。受先（采）においては南張と曰う。居るところ南に近ければなり。〔中略〕而して溥の門弟子を奨進するに、亦た餘力を遺さず。歲科兩試ある毎に、公薦あり、轉荐あり、獨薦あり。〔中略〕所以に弟子たる者、争って社に入らんと欲すれば、父兄たる者も亦た之が子弟の入社を樂しまざるなし。〔中略〕兩粵の貴族の子弟と素封家の兒も、（孫）淳によりて、拜して周（鐘）張の門下に居る者無數なり。諸人一たび贊を執るの後、は、名流もて自ら負い、趾高く氣揚る。

と言っている。注意すべきことは、張溥自身も名士を以て高く持したことであり、時には孔子を以て自ら擬し、四配十哲を従えていると批難を蒙った程であった（『復社紀略』卷四、徐懷丹檄）。併し以上のことは、強いて言えば、復社の目的とする文筆活動の中に含まれていると言つて言えぬことはない。

併しこれだけ名聲が高まってくると、その活動は試験の範圍に止まることがむづかしくなる。これには張溥はじめ、復社の指導者らの性格も關係してくるが、彼等自身がそもそも書齋に閉じこもる學者肌でなく、俗臭の濃い權力渴望者といったタイプの人達であったのである。そこで彼等の政治的活動が始まるのだが、私は彼等が何をやったかと數えたててことをやめて、何が彼等の活動を可能ならしめたかという見地に立つて考察を進めてみようと思う。現に彼等が實際にやったことはと言えば、大きな歴史の流れの上から見れば殆んど取るに足らない些事である。ただ郷紳の身分で政治を動かした原因こそ、何よりもよく明末の世相を知るためのよすがになると考えられるからである。

その第一は大衆動員力である。ここに言う大衆とは必ずしもプロレタリアトの意味ではない。復社是一種の文化運動であり、都市を基盤とする。都市の構成は極めて複雑であつて、截然と治者、被治者に區分すべからざる者がある。また貧困階層は必ずしも階級的自覺を有していなかったから、その動きが今日から見て甚だ不可解な場合もある。眉史氏陸世儀の『復社紀略』卷四に、徐懷丹なる者が復社の十大罪を數えた檄文を作つたとあるが、その中の二條に、

僧道優倡も俱に社中に入り、醫卜星相も友人に非ざるはなし。

拳勇之徒、呼ばずして集まり、大には則ち其の憤毒を肆にし、小には則ち其の覺端を開く。

とあつて、種々雑多の人種を手なづけ、有事の際に利用することができた。

同書に記す實例の一二を拾うと、次のような場合があつた。太倉州知事の劉士斗は着任後、常に兩張と政治を相談して行つたが、署蘇州府事の周之夔から彈劾を受けて、罷免せられた。この人は清廉にして惠政があつたので、士民は其の去るを惜しみ、石を負い、國門に壘を疊ねて以て之を留め、國を傾けて數十萬人あり、之が爲に市を罷む云云。

この周之夔は福建出身で、もと復社の同人であつたが、進士及第後、蘇州府推官に任ぜられ、鄉試同考官を命ぜられる筈であつたのを、兩張が運動して、知太倉州の劉士斗に変更させた。そこで周は大いに兩張、並に劉を恨み、臨時に知府代理となつた機會に、劉を彈劾したというわけ。

兩張は大いに憤激して、周を追い出しにかかる。周の方では先輩、文震孟などの取りなしによつて、過失を悔いて、彈劾の不當であつた反省狀を上司に提出したりしたが、兩張の實力行使は既に始まつていて間にあわなかつた。知府代理の周之夔が崇禎七年の科試において不公平があつたと言つて各學の生員たちが騒ぎ出し、城隍神像を持ち出し、府署に坐せしめて之を詛うに至つた。この場合は復社中の人でない者まで多く之に加わつた。周が府學に向向すると諸生は噪いでこれを追いかえた。諸生には權要の子弟が多かつた爲、周は正直に彼等を告發することが出來ず、心中は慚忿しながら、ひたすら自ら咎を引き、門を閉じて辭職願ひを上司に提出した。上司は取り敢えず、周を移して吳江縣の署知事たらし



め、復社との間の和解を試みたが、周が吳江に赴くと、生員等は復た集つて周を追ひ拂つてしまった。

周之變は辭任の代りに給暇を請うたが許されず、蘇州府推官の任に返つたが、二月経つても府下の紳士にして一人も刺を投じて面會に来る者がなかった。これでは任についても居たたまれないので強いて辭任を請うて休職したが、復社を恨むこと甚しく、「復社或問」の一編を草して、その專横を世に訴えた。その中の一節に、

下は娼優隸卒、無賴雜流に至るまで、盡く收めて羽翼と爲す。士子をして社に入らざるものは、必ず進身を得ざらしめ、有司をして社に入らざるものは、必ず位に安んずるを得ざらしむ。

と言っている。

復社が最後の手段として大衆を動員し、實力行使に訴えた餘風は、張溥の死後、北京朝廷滅亡の際にも、阮大鍼に對する反抗運動として現われている。杜登春の『社事始末』に、

甲申（崇禎十七年）二月、（北京陷落の）變を聞いて哭臨するに、孽（阮大鍼）も班に隨つて禮を行わんと欲す。同社、檄を草して之を攻む。孽、憤り、青年數十を募りて自ら衛る。諸生を侮辱するの意あるに似たり。徐武靜と張退谷と、各々東陽、義烏の力士を率い、戴宿高等も亦た白棒を執りて晝日中を行き、青年を見れば即ちに擊逐す。孽、是を以て敢て臨まず。士氣稍々震う。

とあり、このような大衆動員力が復社運動の武器となつていたのである。

第二に注意さるべきは、復社の情報傳達力である。この中には蒐集力をも含むこと勿論である。最初に復社が結成された時、各縣に一人の社長を置いたが、その任務は、往來傳置を司る、とあるのが、この傳達を意味するものに外ならない。

『復社紀略』卷二に、張溥が復社を結び、「國表集」を選したときのことを記し、

湖州の孫孟樸淳、實に郵置を司る。往來傳送、寒暑も間無し。凡そ天如、介生の游蹤の及ぶ所、毎に前導を爲し、一時、孫鋪司の目ありたり。

とあり、いわゆる鋪司は官設の急遞鋪の長であつて、官文書の傳達を掌るものであつた。孫淳は復社結成當初の名簿には名が見えないが、直後に加入して奉仕にこれ努めたのであらう。そしてその仕事は政府の驛遞そのままであつた爲に、孫鋪司、郵便局長と稱せられたわけである。

當時民間に報房なるものがあつて、文書傳達を行うこと、今日の郵便の如くであつた。これは東林の名士楊璉が逮捕されて北京へ護送され訊問を受けた時、進んでその救援の役を引受けた義人、朱祖文が自ら記した『北行日譜』の中にも見え、北京で手紙を報房に託して蘇州へ送つたとある。このように郵便的な事業が民間においても發達し、報房は恐らく公開された營利事業と思われるが、復社の傳置、或いは郵置とは社長による社中専用の宿驛で文書の傳達をも行つたものであらう。『崇禎實錄』卷一、崇禎元年七月乙亥の條に、

私驛を嚴禁す。

という記載が見え、前後に照應記事がないので確かなことは言えないが、恐らく驛は遞の同義語で、前述の報房、文社の傳置、郵置の如きものを禁止したという意味であらう。もちろん社會的必要に應じて發生した民間の機關が、このような一片の命令で姿を消してしまうことは考えられない。それよりも何故にこんな命令がこのような時に出されたかを考えてみよう。

中國では唐宋以來、水路網の擴張によつて、全國的に商品が流通し、貨幣經濟が盛になつてきたが、こうなつてくると商業の運営に當つて、何よりも缺かせないのは情報の手である。何となれば凡ての生産品が商品化した以上、賣るにも買うにも、全國的な需給關係の總計が、最後のな價格決定の基礎になるからである。この點で私の考えは、中國社會の後進性を強調し、宋元明各時代をおしなべて封建社會と規定し、更に地域的自給自足經濟と見ようとする意見と大きく對立する。そこで若し私の考えに従うならば、當代の商業資本家は、營業に不可欠の條件として、情報の蒐集に心がけ、それが民間情報機關としての報房、郵置、政府側から見た場合は私驛と見做さるる通信網を發達させたのである。そしてこ

れがやがて政府の利害と相容れないようになるのは自然の勢と言わなければならない。

明朝政府の初期においては、政府が必要とする物資の調達には、できる限り自然經濟的な、現物收入を主義とした。農民からは田賦として米穀を納めさせ、沿邊の軍糧は特にこれを鹽法と結合し、特許鹽商人をして穀物を特許料の代りに納入させ、馬匹は民間に委託して養育せしめた。然るに政府の方針は次第に改まって、凡てを一度貨幣化し、現銀を納めさせ、この現銀を以て物資を購入するという、甚だ近代的な市場制度に變つて行つた。田賦は金花銀となり、鹽法の開中法は罷められ、民間牧馬は太僕寺銀となつた。此等の變遷については近頃、すぐれた研究が相ついで發表されたことは周知の通りである。

ところで政府の經濟が現銀化したということは、政府が否應なく商業行爲を開始せざるを得なくなったことを意味する。政府と商人との交渉において、もし權力は政府側にあつたとしても、この場合はあまり役に立たない。官僚にとつては、命ぜられた物資調達が至上の任務であつて、もし價格が法外に高くても、別に官僚自身の腹の痛むことではない。そしてもし商人側が政府以上に、商品についての情報を握つて居れば、それが何よりの強みになる。もちろん政府には政府として官設の情報機關があつて利用可能な筈であるが、無能な官僚と怠惰な胥吏との合作では、狡猾な商人を向うにまわして戦える筈がない。

問題はこの政府御用達の商人であるが、意外にもその正體は、いわゆる郷紳ではないかと思われるのである。もちろんそれが本名を現わすことはない。併し政府機關との交渉においては全然身分的裏付けのない商人では、十分に自己の利益を主張することはできない。そこで郷紳が代理、執事等の名を使って對政府取引を行なうようになることは、別に不思議ではない。

極端な財政逼迫の下にあつて、政府は國防や水利に血の出るような巨額の資金を投ずるが、その利益は恐らく殆んど商人に吸収され、最後的には郷紳を肥らす結果となつたことであらう。漸くにして氣付き始めた朝廷が、商人の情報蒐集活

勳を抑えようとして發した命令が、この嚴禁私驛の記事ではなかったか。

國家の衰頹を餘所にして、鄉紳階級がひとり我世を謳歌したのが明末の世相であると思われる。そして張溥のような有爲の人材が、強いて官界に遊泳し出すことを心掛けず、鄉紳の地位に甘んじたのは、別にその必要を感じなかったからである。富も權勢も名聲も、鄉紳のままでいくとも入手できるので、何を好んで伏魔殿のような北京朝廷へ乗り出して廟堂に立つ必要があろうか。

明朝がいよいよ末路に近づいた崇禎九年四月、武生李璡なる者が上奏し、巨室を搜括して餉を助けしめんと請うた。言う心は財産家の資産目錄を作成し、その幾分を強制的に借り上げて軍費の足しにしたいというにある。谷應泰の『明史紀事本末』卷七十二、崇禎治亂の條に、右の獻議を退けた大學士、錢士升の言葉を載せ、

李璡なる者、乃ごろ倡えて縉紳豪右に名を報じて官に輸せしめ、手實籍沒の法を行わんと欲するを爲す。此れ皆な衰世の亂政にして載せて史冊にあり。而して敢て聖人の前に陳ず。小人の忌憚なきや、一に此に至るか。其れ曰く、縉紳豪右の家、大なる者は千百萬、中なる者は百十萬、其の萬計なる者は枚舉するに勝えず、と。臣は江南の人なり。江南を以て論ずれば、畝を數えて以て對えんに、大數の百を以て計る者は十の六七、千を以て計る者は十の三四、萬を以て計る者は千百中に一二なり。江南は此の如し、他郡も知るべし。且つ富に惡む所の者は、小民を兼併するのみ。郡邑の富家あるは、亦た貧民衣食の源なり。兵荒の故に罪を富家に歸して之を籍沒するは、此れ秦の始皇の（寡婦）巴清に行わざりし所、漢の武帝の卜式に行わざりし所なり。此の議一たび唱えられなば、亡命無賴の徒、相率いて富家と難を爲し、大亂これより始まらん。

とあって、これは堂々たる資本家辯護の論である。首席大學士の溫體仁はこれを以て、沽名の舉であるとして、錢士升を位から退けた。政府の財政は實はどうにもならぬ窮地に追いこまれていたからである。そこで溫體仁に代つて大學士となつた同黨派の薛國觀が、再び富豪獻金の説を唱えて實施しかけたが、これが祟つて、死を賜わるという悲運に陥つた。

『明史紀事本末』の前引の條の下文、崇禎十四年夏四月の條に、

上常に用の匱しきを憂う。國觀對えて以えらく、外は則ち鄉紳、臣等之に任ぜん。内は則ち戚畹、（天子の）獨斷より出づるに非んば不可なり、と。因つて李武清を以て言を爲す。遂に密旨もて四十萬金を借る。李氏盡く其の有る所を盡きしも、追比未だ已まず。戚畹人々自ら危ぶむ。皇子の病むに因りて、倡えて九蓮菩薩の言と爲して云うならく、上薄く外戚を待つ、行くゆく夭折して且に盡きんとす、と。上大いに懼る。國觀又た太監、王化民に忤う。遂に敗る。

とあり、國觀は先の李璡の獻言を再びむしかえて、民間の富豪たる鄉紳、及び外戚から合力を得て一時の急を凌ぐうとした。但しそれは獻金せしめるのでなく、あとで返済する借金としてである。恐らくその腹づもりは、不當利得を得てきた鄉紳、及び賄賂で産を成したに違ひない外戚から、儲けを吐き出させようというにあったであらう。そして鄉紳から借りる分は、國觀ら政府の大臣がその衝に當るが、外戚に對しては天子が自ら責任を持つてほしいと願つた。しかも鄉紳の方は後廻しにして、天子が率先して外戚から借金することを勧めたものである。これが外戚の恨みを買ひ、外戚が宦官を動かして國觀の地位を搖がせ、鄉紳に手を伸ばす暇もなく、彼は失脚し、更に死を賜わるに至つたのである。形勢が既に斯の如くであつたから、若し強いて鄉紳から借金を集めようとしても、恐らくそれは實現不可能であつたと思われる。そして以上の事實は、當時の朝廷の財政が如何に窮迫していたかを物語るものである。

情報蒐集傳達は經濟活動と同じように文化、政治活動においても必要不可欠であつた。復社のような文社の場合、絶えず連絡をとり、情報を交換していなければ、その團結を維持し、事あれば直ちに行動に移ることは望まれない。そこで各縣の社長が責任者となつて、常に情報の傳達に當つていたのである。この際、文書は一縣の社長から隣縣の社長へリレールされる場合もあつたであらうし、もしそれが不便な際には私驛と稱せられる民間の報房の如きものが利用されることもあつたであらう。

文社の情報網はそのまま直ちに政治活動に轉用することができる。また周介生の應社の時代であるが、撫州の艾千子が介生や張溥の文章を批難し、代つて應答した張采と論戰をかわした。遂に兩者の間が決裂し、

是において三吳の社長は單を各邑に傳えて、共に之と絶たしむ。

ということが、『復社紀略』卷一に見えている。相手を村八分にして、蘇州近傍へは寄せつけぬことにしたのである。これはもう文章活動の範圍からはみ出した行爲になる。

當時の官界においては、黨派は互いに對立する敵黨の弱點を發いて失脚させる手段が一般的に行われた。『復社紀略』

### 卷三に

閻卿（太僕卿）史輩、前に御史に任せし時、己に異なるものを參劾し、恣意に門戸を傾排し、之に處らんと欲す。輩は先に淮揚に巡按たりしとき、婪賄甚だ多し。天如（張溥）、揚郡の春元（詹事？）鄭元勳に囑して之を廉し、備さに其の贓跡を得たり。乃ち款單を以て之を臺省に達す。（中略）輩は此により察を被り、獄に下して贓を追せらる。

とあり、當時の官僚は中央で勢力を振つても、嘗て地方官であつた時には、大なり小なり脛に傷をもっていたので、それを洗いたてられると、忽ちその地位を失わねばならなかった。そこで復社のような廣汎に強力な情報網を掌握すれば、自然に中央の人事に干渉できるようになる。前引の條の下文に、

乙亥（崇禎八年）の京察に、張溥は庶常なりと雖も、察事に與かり聞くを得たり。

とある。そこでこのような強力な情報機關の復社を味方につけるか、敵にまわすかで、小官僚は勿論、中央の大臣の身上にも重大な影響が及んでくる。且て張采の同郷の監生、陸文聲なる者が、張采を恨むによつて、復社を彈劾する疏を上り、政府が實情調査に乗り出した。そこで張溥は陸文聲の子陸茂貞に人を介して調停を依頼させた。『復社紀略』卷四に、茂貞因りて京に疾赴し、文聲の爲に天如（張溥）の語を述ぶ。文聲、默然として答えず。茂貞曰く、復社の黨羽、天下に半ばす。獨り子孫の計を爲さざる乎、と。文聲乃ち之を許す。

とあり、陸茂貞の言によれば、復社に敵對すれば、子孫が世に出られなくなる、と言うのであった。

そこで朝廷の大臣も、陰に陽に復社の後援を頼りとする者が多くなってきた。これを復社の側から見れば、同志の先達と言ふことができる。『復社紀略』卷二に、

其の先達において崇んで宗主と爲す所の者は、皆な字内の名宿なり。南直には則ち文震孟、姚希孟、顧錫疇、錢謙益、鄭三俊、瞿式耜、侯峒曾、金聲、陳仁錫、吳牲等。兩浙には則ち劉宗周、錢士升、徐石麟、倪元璐、祁彪佳等。（河南、江西、湖廣、山東、陝西、福建、廣東を略す。）諸公の職任外にあるときは、則ち之に代りて方面を謀り、内に在りては則ち之が爲に爰立を謀る。皆な陰に之が地を爲して之をして知らしめず。事後に彼の人自ら悟り、乃ち心に之を感ず。結納を假らずして、而も四海心に盟う。門牆の日に廣き所以、呼應の日に靈なる所以は、皆な此に由る。（中略）又た復た後進を引掖し、内にしては中（書）行（人）評（事）博（士）、外にしては名望あり、考選に應ずる者を推知して、俱に薦拔を力行す。其の六部の遷轉、及び臺省の舉劾、皆な與かり聞くを得たり。天如（張溥）は庶常を以て在籍すと雖も、駿々として公輔の望を負うと云う。

とあって、張溥を無位の宰相であるかのように見立てている。このようにして順序を立てて考察してみると、もし張溥が朝廷大臣の任命に容喙したとしても、左程不自然な感じがしなくなるのである。

## 五 絶望の時代

復社などの文社の活動だけを見てみると、この時代は何という平穩な時代であつたろうか、というような印象を受けがちである。併しそれは復社の中心であつた江南地方がまだ平穩であつただけであつて、一たび目を轉じて、北方の首都北京、及びその附近一帯の形勢を観察すれば、既に戦火は各省に蔓延し、實に容易ならざる重大な危機に陥つていたのである。平和どころではなく、それこそは絶望の時代に入つたのだ。

崇禎の前、天啓年代は暗愚な天子熹宗の下に宦官、魏忠賢が權勢を振い、東林黨の名士らに苛酷な彈壓を加えた陰慘な時代であつたが、不思議にも當時の人たちは、それが直ちに絶望の時代だとは見ていない。反つて名君の素質ある崇禎帝が即位し、魏忠賢一黨を翦除追放して明るい前途が約束されたように感じた、その後から始まつたと、異口同音に言っているのである。更にはっきり言えば崇禎二年、己巳の歲から後、救うべからざる絶望の時代が訪れたと言うのである。

この歲は、清の太宗が萬里の長城を越えて内地に入り、始めて北京を攻撃したが、志を得ずして引き上げた年である。それならば何がこの事件をして絶望の端緒たらしめたのであろうか。これを説明するには、前線の督師、袁崇煥と崇禎帝の關係から説き起こさなければならぬ。

袁崇煥（？—一六三〇）は、原來武將ではなくて文人である。萬曆四十七年に進士に及第し、天啓の末期、山海關の前進基地である寧遠城を守り、清兵の侵入を撃退して功を立てた。然るに崇禎帝即位後、袁崇煥の舉動が屢々宜しきを失し、それが延いて明王朝の命脈にも關わるほどの結果を惹起することになった。彼の第一の失敗と見られるのは、崇禎二年、渤海灣口に位する皮島に據つた毛文龍を撞殺したことである。もちろん毛文龍の勢力が益々伸張して行けば將來どうなつたかは、何人も自信を以て斷言することはできない。併し袁が毛文龍を殺したために、その結果として、山東半島に移つた舊部下の孔有徳らが數年後、叛亂を起し、登州一帯を荒した後、逃れて清朝に降伏し、これによって無數の大砲と火藥が清朝の手に渡つたのである。

毛文龍が殺された直後、清の太宗は明の前線に總攻撃をかけると共に、自ら一軍を率い長驅して北京に迫つた。崇禎帝は大いに驚いて天下に詔して勤王の兵を召したので、袁も直ちに北京へ馳せ參じ、崇禎帝から嘉賞せられた。そこまではよかったが、袁が立去つた後、前線の防衛が崩壊し、殊に遵化、三屯營の要衝が陥落し、將領の戦死する者が多かつた。袁は一方から見れば入援の功はあつたが、前線防衛の最大の任務を放棄したとも見られるのである。そこで北京における袁の評判は、急轉して下落した。都人は清兵をしてむざむざ國都の下まで侵入させたのは、袁崇煥の手拔かりではない



か、と非難の聲をあげた。

袁崇煥が天子の密旨を受けて、清朝と講和の瀬踏みをはじめていたのは事實である。そこで朝士の中には、袁はわざと清兵を都近くまで引きよせ、これによって朝廷を脅し、無理に和平を仕上げようとの魂膽ではないか、と鑿った風評を立てる者もあった。そんな疑惑を一層深める事件が起つたのは、入援の將、滿桂が城外で清兵と奮戦しているとき、城上から大砲を打って滿桂の兵をおおかた薙ぎ倒し、滿桂も全身に矢傷を負うたが、その矢を驗べると、みな袁軍の矢であったという。崇禎帝はいよいよ袁の本心を疑い、職を免じて獄に下したのであった。或いはこの上に更に清の太宗が反間の計を行い、明の宦官の使者を誑いて、袁が内應の謀あるように見せかけ、崇禎帝はまんまとそれに乗せられたとも言ふ。清兵は北京を脅し、人心を恐慌に陥れただけで引上げたが、翌三年、袁崇煥は謀叛の罪を問われ、市において磔刑に處せられた。妻子は連坐して三千里に流せとのことであつたが、實際は子供がなかった。財産を籍沒せよとの命令であつたが、家には一石の儲えもなかった。天下これを冤とす、と『明史』に見えている。

これに衝擊を受けた配下の武將、祖大壽らは、兵を引きつれて錦州に逃げ歸り、やがて清朝に投降した。この時、城内の大小の砲三千五百臺が清朝の手に歸した。

いわゆる崇禎二年己巳の變は、單に清の太宗の爲に北京を攻撃されたという恐慌だけに止まらず、これに附隨して起つた明朝の内部的分裂の方がむしろ大きな痛手であつた。そして若しその責任を問うならば、袁崇煥と崇禎帝とがその半々を負うべきであつたであらう。

『崇禎實錄』卷四、崇禎四年五月癸未の條に、吳執御なる者の上言を載せ、

前年、遵（化）永（州）の變に、袁崇煥、王元雅等、皆な數百萬の金錢を以て、狼狽して守を失えり。

とあり、莫大な軍需の損害を袁の責任として追究している。更に毛文龍を殺した結果が如何に重大な損失を招いたかは前述の通りであり、彼に對する評判は、朝士の間でも、都民の間でも決して芳しいものではなかつた。ただ彼が悲劇的な最

期を遂げ、且つ清廉であつた點で後世の同情を集めたが、併し清官は必ずしもただそれだけで名臣とは言えない。清官の害は濁官よりも甚しいという皮肉な諺さえ一方にはある。

さりながら崇禎帝の袁に對する處置も甚しく當を失したものであつた。袁に對する極刑のために清朝に走らす結果となつた武將、祖大壽は嘗て寧遠の城によつて、清の太祖と戰つて大いにこれを破り、太祖の急死もこの時の砲傷が原因であると言われた。もちろんこの時の戰勝は西洋砲の威力の賜であつたが、今やその大砲は祖大壽らの歸降によつて、そつくり清軍に引繼がれることになつたのである。

袁崇煥のためにその親分、毛文龍を殺された皮島の將領、孔有徳らがやがて叛亂を起し、清朝に歸降したのも、當然の徑路を辿つたものと言えそうである。毛文龍の死後、孔有徳等は山東の登州に收容され、官軍に編入されていたのであるが、祖大壽らが清に降つた直後、暴動を起して登州に據つて謀反した。彼等は萊州を攻めて勝たず、數百隻の船に登州で得た大砲や掠奪物を載せ、旅順口附近から清軍の出迎えを受けて投降したのであつた。だから若し袁崇煥の刑死、祖大壽の離叛がなければ、孔有徳らもそのまま明の軍中に留まつていることもあり得たと思われる。

十九歳で即位した崇禎帝が、直ちに宦官、魏忠賢を退け、その一黨を誅戮した決斷力は賞賛に價するが、同じやり方を袁崇煥に適用したのは單に若氣の過ちではなく、この天子のヒステリックな性質を暴露したものであつた。

『崇禎實錄』卷十五、崇禎十五年四月戊子の條、給事中倪仁楨の奏上の中に、大臣謝陞が言つた言葉を述べ

謝陞、忽ち曰く、皇上惟だ自ら聰明を用い、察々を務となし、天下俱に壞る。

とあるのは、反つて肯綮に當っている。そして天子の失敗はこれを輔ける大臣、溫體仁の失敗である。同書の下文、六月戊辰の條に、御史、吳履中が奏言して、

臨御の初め、天下猶お未だ大いに壞れざりしなり。特に溫體仁を用い、嚴正の義に托して、媚嫉の私を行ない、朝廷をして人に任じて以て事を治むるを得ざらしめて、禍源を醸成せるなり。

と言ったとあり、同じことを劉宗周が更に詳しく地方から天子に上言して、同書卷九、崇禎九年十月壬申の條に載せられている。

己巳より以來、日として未だ雨せざるに綢繆せざるはなし。而して天下禍亂、一に此に至る。往には袁崇煥、國を誤る。其他は法の爲に過を受けしに過ぎざるのみ。小人競い起りて門戶の怨みを修め、朝士の己に異る者を擧げて、概ね煥の黨に坐せしめ、次第に之を重典に置き、或いは籍を削りて去らしむ。此より小人進みて君子退き、中官事を用いて外廷浸やく疎なり。朝政日に隳ち、邊政日に壞る。今日の禍、寔に己巳に之を釀成せるなり。

この劉宗周は崇禎十五年に吏部左侍郎として朝廷に召されているが、『明儒學案』卷六十二、彼の略傳によると、今度は天子の方から、

國家敗壞、己に極まる。如何してか整頓せん。

と尋ねられた、とある。以上によつても、己巳の歲以來、救いようのない絶望感が朝廷の上下にただよっていたことが察せられるのである。

この絶望感の背景をなす政治、社會の實狀は抑も如何なるものであつたであらうか。その指標となるのは矢張り財政の困難であらう。そしてこれは崇禎帝の初めから、既に歳出入が破産狀態に陥っていたことが、『崇禎實錄』卷一、崇禎元年六月丁未の條、戶科右給事中、黃承昊の言によつて知られる。曰く、

祖宗の朝は邊餉止だ四十九萬（兩）。神祖の時、二百八十五萬に至り、先帝（天啓）の時、三百五十三萬に至る。其他京支雜項は、萬曆間歲放三十四萬に過ぎず。邇來又た六十八萬に至る。今出數は共に五百餘萬、歳入は三百萬に過ぎず。卽し其の數に登るも、己に不足と爲す。況んや外に節（積）の缺ありて、實計は歳入僅に二百萬のみ。

これは實に驚くべき數字と言わねばならない。こんな狀態では、むしろこれから先、十數年を持ちこたえた方が不思議に思われるくらいである。

ここで考えなければならぬのは、このように膨張した財政支出の金銭が、いったい最後に何處へ納まったか、ということである。歳出の大宗である軍事費の一部分は軍人に支拂われたことは勿論であるが、軍人はいつも貧乏である上に、給料の運配や人員整理におびえていた。すると軍需品の購入に費された部分が多かつた筈であるが、果して物資納入は公正に行われていたであらうか。案外一方には軍需景氣に煽られて我世の春を謳歌した者が多かつたのではあるまいか。そして最大の儲け頭は生産手段の所有者である大地主、大商工業者であり、ずばりと言えばこれは郷紳層に外ならなかったのである。この郷紳間に溢れた現銀が、彼等に自信を持たせ、彼等を傲慢ならしめたという圖式を描くことが可能であり、その一人の代表者が實に外ならぬ張薄であつたのだ。

これに反し純粹の官僚生活者は、必ずしも全部が金運に恵まれず、反つて名譽職であることに魅力を感じる人たちもあつた。もちろんそこには權力があり、權力は直ちに換金できる。官僚の正規の俸給が低額であることが、彼等の氣風を墮落させる原因となつた。崇禎帝も即位の初めには、頽廢した官僚の紀綱を引きしめようと努力し、官僚の中にもこれに一縷の望みを托して獻策する者があつた。『明史紀事本末』卷七十二、崇禎治亂の章、崇禎元年の條に、戸科給事中、韓一良の上言を載せる。曰く、

皇上より平臺に召對せられしとき、文臣錢を愛せず、との語ありき。然れども今の世、何れの處か用錢の地に非ざらんや。何の官か愛錢の人に非ざらんや。(皇上も亦た文官錢を愛せざるを得ざるを知るか。)向に錢を以て進む。今安んぞ錢を以て償わざるを得んや。臣は縣官より起りて言路に居る。官を以て之を言え、則ち縣官は行賄の首たり。而して給事は納賄の魁たり。今の蠹民を言う者、俱に守令の不廉なるを咎む。然れども守令亦た安んぞ廉なるを得ん。俸薪幾何ぞ。上司の督取するに、無碍の官銀と言わざれば、則ち未完の紙贖(抵當流れ處分益金)と言う(て應ず)。衝途の過客には、動もすれば書儀あり。考滿して朝觀するには、三四千金を下らず。夫れ此の金は天より降るに非ず、地より出するに非ず。而して守令の廉なるを欲するも得んや。科道は號して開市と爲す。臣は兩月來、金を辭すること

五百なり。臣の寡交にして猶お然り。餘は推すべし。乞うらくは大いに懲創を爲し、其の已甚しき者を逮し、諸臣をして錢を視て汚と爲し、錢を懼れて禍と爲さしめば、庶幾くは錢を愛せざるの風、觀るべきなり。

これは一々尤もな議論なので、天子は大いに嘉獎し、擢んで右僉都御史に任じた。そして臧吏に對する懲罰も或る程度まで實行しだしたことは、『崇禎實錄』卷二、崇禎二年九月辛亥の條に、順天府尹、劉宗周の上言を載せて、

頃、臧吏の誅を嚴にし、執政より以下、重典に坐する者十餘人、救時の權を得たりと言ふべし。然れども貪、盡くは息まざるなり。貪風の息まざるは、導く者の未だ善を盡さざるに由るなり。

とあり、あまりにも甚しいと思われる貪官を處罰してみたが、一向に利き目がなかったことを明言している。なお『明儒學案』卷六十二、劉宗周傳には、丁度この頃、順天府尹であつた彼が、

京師戒嚴するに、上は廷臣が國を謀りて忠ならざるを疑い、稍々奄人に親向す。

という狀態を憂えたことを記しているのは注意さるべきである。この年、清軍の侵入にあい、入援した袁崇煥に二心あるを疑つて投獄したのは、特に宦官の言に誤られた結果であつたと言ふ。併し崇禎帝が大臣よりも宦官を重んぜざるを得なくなつたについては、それなりの理由があつた。『崇禎實錄』卷九、崇禎九年八月庚辰の條に左の如き記事がある。

張元佐を以て兵部右侍郎と爲し、昌平を鎮守せしむ。時に太監の天壽山を提督せしむる者は、皆な即日に行く。上、閣臣に語りて曰く、内臣は即日に行道す。而るに侍郎は三日して未だ出でず。何ぞ朕が内臣を用うるを怪しまんや。これには朝廷の大臣らも返す言葉がなかったと思われる。斯くして一度は魏忠賢の黨派を一掃して宦官を彈壓した崇禎帝であつたが、再び宦官を信頼するに傾いてきたのである。

## 六 政争渦中の復社

以上のように諸般の情勢を分析して、考察を押し進めて行くと、一郷官にすぎない張溥が朝廷における大臣の進退に裏

面から策動して効果をあげたとしても、さして不思議でないような氣がする。但しそのような行動をとるに至ったのは、やはり何か切羽つまつた理由がなければならぬ。

復社が情報網をもち、敵方の弱點となる祕密を探れば、相手方も亦た同じような戦術を以て對應するのは當然の歸結である。當時、崇禎三年から大學士として權勢を振つたのは、湖州府烏程縣出身の溫體仁であり、復社派の朝臣と争い、常に復社を目の敵としていたが、七年頃に至つて、明らさまに復社の彈壓に着手した。『復社紀略』卷二に、

兩張、既に烏程（溫體仁）と隙あり。烏程深く慮るらくは、溥は在籍と雖も、能く遙に朝政を執る、と。乃ち心腹をして往いて吳地に官たらしめ、其の隙を伺いて之に中てんとす。（中略）因りて御史、路振飛を選んで、蘇松巡按となして、之を圖らしむ。

とあり、この路振飛は着任すると、蘇松地方における郷紳が豪僕を縱つて郷曲に武斷する實狀を調査して奏上した。そこへ嘗て復社社中であつた周之夔が變心、「復社或問」の一篇を草して世に廣めて非難の聲をあげることがあり、更に陸文聲が張采を彈劾する等のことが重なつてきた。

時に中央では溫體仁の腹心、蔡奕琛が事を用い、復社に専横の事實があるかどうかの真相を調査するに決し、南直隸の學政倪元珙にその事を命じた。然るに倪はもともと復社の同情者であつたので、反つて張溥らの篤學なのを讃え、ただ社中數名の劣生の名を列擧して責を塞いだ。このために倪は地位を下し左遷された。蔡は更に陸文聲らを嗾して復社攻撃を強めようとすれば、復社の方でも總力を擧げて溫體仁を彈劾するに努めた。

復社にとって幸いなことは、前後八年に互つて權勢を振つた溫體仁が病氣のため、崇禎十年の六月に引退したことであつた。併し間もなくこれに代つて首席大學士となつたのはその腹心の薛國觀である。復社と溫黨との抗争は依然として熾烈を極めたが、この時も復社にとって幸いであつたのは、薛國觀が外戚、宦官に忤つて、崇禎十三年六月を以て罷免せられ、やがて賄賂をとつた疑いで獄に下されたことである。これには或いは復社側の運動もあつたかも知れぬと思われる。

少くも薛國觀やその黨の蔡奕琛は、自分らの罪は張溥によって造作された冤罪であると信じ、殊に蔡は獄中から上書して天子に訴えている。

薛國觀に代つて周延儒が、崇禎十四年に召されて大學士となった。周延儒は嘗て張溥らが會試に通過した際の正考官であり、當時の觀念から言えば座師と門生との親密な間柄である。そこで周延儒が、溫體仁と全く違つた派閥から大臣となつたのは、張溥ら復社の後援によるものだ、というのが當時専らの風評であつたらしい。

周延儒が入閣した經緯を比較的詳しく傳えているのは『崇禎實錄』卷十四、崇禎十四年九月甲申の條の記載で、

是より先、丹陽の監生、盛順、及び虞城の侯氏、共に金を欽めて十萬緡を得たり。太監の曹化淳、王裕民、王之心等に納賄して復た延儒を用いんことを營求せしに、少しく之を俟たしめらる。年を踰えて工部主事、吳昌時、家最も富む、私帑を出すこと前數の如くし、進士周仲璉をして伏行して故の大學士馮銓の家に抵り、潛に内に通ぜしむ。果して召用を得たるは、昌時の力、多きに居る。延儒深く之を徳とす。

とあり、吳昌時は張溥と同じく周延儒の門生であり、また復社の社中である。曹化淳等は當時崇禎帝の親任を得ていた宦官であつた。蔣平階の『東林始末』は殆んど右と同じく、ただ盛順の名が賀順となつていただけで、これによれば張溥は殆んど關係なかつたものの如くである。

更に吳偉業の『復社紀事』によれば、周延儒の大學士任命には、張溥のみならず、吳昌時も實は關係なかつたのだと言ふ。尤も吳昌時が頻りに策動したことは事實として認め、彼が張溥に書を送つて、盛順伯を先ず動かしてその助力を得べきを説き、盛はこれを聞いて、若し張溥の依頼あれば即座に實行に移りたしと提議したが、張溥は黙して應じなかつた。そこで吳昌時は獨り己が意によつて動き、宦官らに働きかけたが、結局要領を得なかつた。反つて天子が發意して周延儒を召したのであつて、

召すこと上意より出で、初より他あるに非ざりしなり。而して來之（吳昌時）は自ら謂えらく、謀は己が行えるなり、

と。世事を視て彌々爲すに足らずとせり。

と結論している。併しこれには實はおかしな點がある。本當に張溥が關係しなければ、別に張溥を引合いに出す必要がなかったし、吳昌時の謀が行われなかったならば、同様にそんなことに初めから論及する必要はなかった筈である。吳偉業は張溥の門人であつたという、あまりにも親しい關係から回護の筆をとつたと見るべきで、反つて信頼性を缺くのである。言いかえれば、吳偉業が否定したことが、反つてその事實が存在したことを物語っていると解すべきであらう。

『明史』卷二百八十八、張溥傳には單に、其（周延儒）の再び相たるを獲しは、溥、これに力ありたり、と記すのみで、『資治通鑑綱目三篇』卷二十、崇禎十四年九月の條には、

溥、乃ち吏部郎中吳昌時に屬し、爲に近侍に交關す。會ま帝、舊臣を用いんことを思う。遂に詔して延儒等を起たしむ。

とあるが、恐らくこの邊のことが真相に近いのであらう。この周延儒は先に崇禎二年から六年六月まで大學士の位にあり、次相の溫體仁の謀によつて地位を追われた者である。長い宰相の經驗者であつたから、誰に運動して貰わなくても相位に復しておかしうはない。併し有力な後援者があれば一層實現が容易である。またそういう際には門生たちが運動を試みるのは當時の官場における常識であり、また吳昌時が懸命になっている時に、もし張溥が冷やかに傍觀していたとすれば、その方がおかしい。恐らく兩人とも多かれ少なかれ、周延儒の擁立運動に参加したことは疑いない事實と見るべきで、ただそれがどれだけの實效を現わしたかの評價は、當時の人達の間においても區々であつたろうし、況んや今日から推定するなどは全くの不可能事に屬する。

吳昌時が宦官に對して、最初の十萬緡の上に更に同額の賄賂を送つたという話は、當時における色々な實狀を現わしてゐて甚だ興味がある。軍需景氣によつて大きく儲けた郷紳層は、その一部を賄賂として要路の權力者に附け届けして自己の野心を満したが、實はこのような行爲を絶えず繰返すことによつて、今度は郷紳層が權力者にとって必要不可欠な存在



となり、結局それが郷紳を郷紳たらしめる地盤となったのである。次に十萬緡という金額は、銀に直しても一緡一兩とすれば千貫目、四トンに近い重さである。もしこれを荷車につけて分配して歩くとすれば大へんな騒ぎであるが、當時民に會票という爲替手形が行われていたことが、先に引いた朱祖文の『北行日譜』にも見えている。手形で決済がすめば、深夜人目をさけて授受するに極めて便利である。

賄賂が宦官に届けられたということは、宦官の發言力の増大を物語る。この頃崇禎帝は朝廷の官僚大臣に對して不信任を抱くことがいよいよ甚しくなり、同時に官僚群から孤立していた。『崇禎實錄』卷十一、崇禎十一年正月乙丑朔の條に、  
任丘、清苑、涑水、遷安、大城、定興、通州の各官、貪縱不法なるを以て、命じて逮入せしむ。蓋し内調して得たるなり。

とあり、内調とは天子直接の偵探であつて、もちろん宦官を使つてのことである。そして各官の貪縱を見逃していた公式機關の撫按らがその溺職を責められている。これが元旦勿々の政治であつたのだ。

崇禎帝が官僚の背任罪を責めて誅戮を加えた例は數えきれないが、單なる死刑では満足せず磔刑のような極法を用いたのは、その主權者にあるまじきヒステリクな性格を物語るものである。『崇禎實錄』卷十二、崇禎十二年八月庚戌の條に次のような記事がある。

故の庶吉士鄭鄮を市に磔にす。是より先、中書舍人許曦、鄭鄮の不孝瀆倫なるを許奏し、溫體仁の疏と合す。法司をして定罪せしむるに辟に擬す。上、命じて等を加えしむ。鄮は武進の人、初め庶吉士に選ばれ、即ち直諫の聲あり。書を讀み文を能くす。故に文震孟、黃道周、皆な之と遊ぶ。當時（溫體仁）、鄮を借りて震孟、道周を傾けんと欲す。故に讞駁逾々重し。而して鄮は郷に居り、淫傲不法なること多し。遂に慘禍に罹る。西市に詣りて尙お大いに冤を呼ぶ。廷臣皆な法を畏れて敢て申救する莫し。

そしてこの溫體仁も宦官曹化淳と争つた際には遂に敗北し、病を理由に退任せざるを得なかった。更に溫が後任に推し

た薛國觀も間もなく黜けられて死を賜わった。このように天子が刑を用いなければ用いるほど、益々官僚から孤立するので、さてこそ舊臣を再登用しようという氣にもなり、そこへ周延儒が浮び上ってきたわけである。

周延儒が宰相となった爲、復社に對する追究は自然に沙汰止みとなった。併しこれと前後して、崇禎十四年五月、復社の張本人たる張溥自身が病歿した。年僅かに四十歳であつたと言う。

併し崇禎帝の周延儒に對する信頼は決して厚いものではなかつた。同時にこれは清朝からの侵攻、内亂の蔓延が日一日と甚しくなり、朝廷の財政が益々苦しくなるといふ環境の悪化が手傳つていた。やがて周延儒の側近、吳昌時、周仲璉、幕客董廷獻らが私利私欲を營んでいる事情が摘發された。天子は自ら中左門に臨み、吳昌時を引き出して訊問を加え、拷掠して脛を折るに至つて止めたとある。遂に吳昌時は棄市せられ、周延儒は自盡を賜わつた。時に崇禎十六年十二月、明の滅亡する數月前のことであつた。

そんなら天子を失望させた大臣官僚に代つて、ある程度の信頼を保つていた宦官の實體は如何であつたであらうか。虞城の侯氏、更に恐らくは吳昌時が、周延儒を宰相にする爲に働きかけた宦官曹化淳が天子に氣に入られたのは、美人を後宮に進めたためであるらしい。『崇禎實錄』卷十五、崇禎十五年七月丁丑の條に、

太監曹化淳、江南の歌姬數人を進め、甚だ嬖を得たり。

と見え、同年九月戊子の條には

命じて良家の女を採り、九嬪に充てしむ。

とあり、この時は流石に官僚から抗議が出て實行が中止されたが、この獻議にも或いは曹化淳が加わつていたかも知れぬ。そして最後に李自成の軍が北京城に迫つた時、彰義門を開いて賊を入れたのは、外ならぬこの曹化淳であつた。天子が已むを得ず、すがりつゝいた宦官に、最後の土壇場で裏切られたのだ。

宦官の明滅亡に對する責任のもう一つの例を挙げよう。明が清朝に對抗する最大の武器は大砲であつたが、銃砲火藥の

製造は宦官の掌握下にあった。『明史』卷七十四、職官志宦官の條に、所謂ゆる二十四衙門の外に、

安民廠 舊名王恭廠。各々掌廠太監一員あり。貼廠叅書、定員無し。銃砲火藥の類を造るを掌る。

とあり、その所在は安定門に近い場所であつたと思われる。然るにこの火藥廠が度々爆發事故を起しているのである。いま『崇禎實錄』からその記事を拾うと、

七年九月丁巳、王恭廠の火藥災す。數千餘人を傷斃す。(卷七)

十一年四月戊戌、新廠災す。七百餘人を斃す。(卷十一)

同年六月癸巳、安民廠災す。萬餘人を傷け、武庫幾んど空なり。五千金を發して賑恤す。(卷十二)

同年八月丁酉、安定門の火藥局復た災す。(卷十二)

十二年六月庚子、火藥局災す。(卷十二)

とあり、このように連年爆發しては、それが前線の軍事に影響せぬ筈はない。果して同書卷十七、崇禎十七年二月戊子の條に、

寧武關陷る。寇(李自成)の關に薄るや、檄を傳えて、五日にして下らざれば、且つ之を屠らん、と。總兵周遇吉、悉力拒守し、大砲を以て賊を擊殺すること萬餘人。會ま火藥盡きたり。

とあつて火藥の不足のために城が陥つたのであつた。こんな例は恐らく至る所で見られたことであろう。

もちろん度々の火藥爆發はその直接の原因が何であつたかは知る由もない。併しそれは掌廠宦官の職務怠慢からきたものである點に變りはない。火藥製造のような極秘重要作業は、天子がこれを外廷に委託することを好まず、本來ならば工部、若しくは將作監に屬すべき業務であるに拘らず、天子の直接監視下におくため、特に宦官に委任したのであつた。然るにそれがこのような狀態に陥つては、期待に負くことこれより甚しきはない。天子は已むを得ずして信任せざるを得なかつた宦官からも實際は孤立していたのであつた。絶望の時代たる所以である。

官僚は天子を信頼せず、天子も官僚を信頼せず、官僚は互いに官僚を信頼せず、そこに黨を造ることを禁ぜられながら、しかも黨爭が盛行する原因があった。『明史紀事本末』卷六十六の論贊に、倪元璐の言を引き、

宵人と正人と皆な以て敢て黨を言わずして、而して黨愈々熾んなり。黨愈々熾んにして國是問うべからず。

と言っているが、絶望的な相互不信の世界において、只一つ通用する原則は權力であった。黨爭はその本質において權力闘争に外ならないのは古今同斷である。

## 七 張溥の人物

復社は文社なる名の文化活動に始まりながら、結局はその社規に反した政治活動に終ってしまった。或いはそれは已むを得ざる反權力闘争であつたと辯護されるかも知れない。併し實際の場合、反權力運動を推進する集團自身は兎もすれば權力の信者であることが多い。我々はその實例を復社の領袖、特に張溥その人の中に見出すことができる。いま『復社紀略』によって、その最も特徴的な佚事の一、二を紹介しよう。

門人の吳偉業が會試に首席で合格した際、その答案を刊刻して發表したが、普通そういう際には房師が序文を附するのが慣例であつた。房師とは約二十名ほどの同考官のうち、該答案の擔任者となり、下見して推薦した者のことで、吳偉業の房師は李明潛であり、吳の父と親交があつた。然るに張溥は己の門人だという理由で、吳會元の刻稿に、天如先生鑒定という標題をつけさせた。自己を無視された李明潛は大いに怒って吳偉業を破門し、門生の籍を削るといきまいた。吳偉業はびっくりして、同僚の徐汧にたのみ、同道して詫びを入れ、罪を出版した書肆になすりつけ、警察から訓戒して貰うことで取繕つた。張溥としては門人を私物化して、完全に自己の權力の下におかぬと承知せぬ性質なのであろう。次には任官して間もない吳偉業に命じ、人もあろうに權相溫體仁を彈劾させようとして吳を困らせたことがある。更に刻稿のことによって李明潛を恨み、崇禎八年の京察にこれを陥れようと計つたことがある。

張溥の父は翊之と言ひ、太學生で終つたが、その兄の輔之は進士となり、官は南京禮部尙書に至り、自然に財力富厚であり、陳鵬、過岷なる二人の僕に家事を委任してその專横を默許した。二人は翊之を蔑視し、殊にその子の溥は婢の出であるので、待遇するに禮を缺く所が多かつた。溥は血を嚙んで壁に書し、仇奴に報ぜずんば人子に非ざるなり、と誓つた。後に溥が庶吉士を以て郷居して權勢を振うようになると、府の理刑に申立てて陳、過の二僕を捕え、崇明縣の獄に下し、知縣顏魁登が獄吏に言ひ含め、兩人を暗斃したと言ふ。何故に崇明縣まで送つたかの理由は明かでないが、鹽まわしにした揚句、最も人目のつかない所で暗に手を下したのであらう。概して當時の郷紳には階級的な自尊心が強く、下層階級に臨む時、殆んどこれを人間視しない風があつた。尤も張溥にすれば、彼は二僕が全く無力なるが故にこれを蔑視したのでなく、當時江南における弊害として指摘されたように、いわゆる豪奴が主人の權勢を笠に着て横暴に振舞う風があり、二僕は正にそれに當るものであつたが爲にその僭越を憎んだのである。

張溥の下層階級に對する差別意識は胥吏の上にも及んでゐる。同派の祁彪佳が蘇松巡按になつてきた時、積猾四人を廉してこれを杖殺したことが、『明史』卷二百七十五の彼の傳に見えてゐるが、『復社紀略』卷二によると、そのうち太倉州の奸胥、董寅卿なる者の姦を告發したのは兩張であつたと言ふ。また崇禎九年、武舉の陳啓新なる者が時弊を上奏して、宰相溫體仁の意に叶ひ、一躍吏科給事中に拔擢されて世人を驚したが、復社は手を盡して身許を洗ひ、彼が嘗て淮安の胥吏であつたことを突きとめ、これを彈劾してその失脚の緒を造つた。明は太祖の遺訓として、胥吏は科舉に應ずるを許さないことが先例となつてゐたからである。

以上のような點で、張溥の人間觀は決して今日から見ても新しいとは言えない。これは當時の社會の水準を現わすものであるが、さればと言つて直ぐ當時を封建社會だと定めてしまうことは適當でない。そう言い出せば現今の世界でも大半は封建社會ならざるはないであらう。そもそも繪に描いたような近代社會などは、何處を探しても見つかるまいからである。

張溥の思想なり行動なりが、それほど時流から遙かに抽んでるものではなかったとしても、猶お且つ彼が歴史上において占める地位が甚だ大なるものがあつたことは否定できない。彼の生涯は四十歳と稱せられ、三十歳で進士に合格したとすると、社會的に一人前の地位を認められて活躍したのは僅々十年ほどしかない。學問上の活動はそれ以前から始まつたとしても、せいぜい合せて二十年そこそこのものであらう。併し彼はその間に三千餘卷の著を著したと言う。我々はその全部の内容を知ることが出來ず、今日に傳わるものの多くは、著書と言うよりもむしろ編集、又は刪正と言うべきであつて、嚴密な意味における學問的な研究とは言い難い。さりながらその故にその影響を無視することは決して適當ではない。

彼の名を冠せられた出版物の中、我々にとって最も注意すべきものの一は、『歷代史論』であらう。近時の坊刻本は張溥の「資治通鑑紀事本末論正」、又の名「歷代史論」十二卷に「宋史論」四卷、「元史論」一卷を加えて中心とし、前に高士奇の「左傳史論」二卷、後に谷應泰の「明史論」四卷を配して合刻したもので、光緒五年譚宗浚の序を附している。今その全體に亘つて論ずる暇がないが、最も特徴的な彼の史論の一節として、南宋の高宗に對する意見を紹介するに止めよう。

「宋史論」卷二に、北宋末の靖康の變を扱つた「金人入寇」以下の數章がある。普通に北宋の滅亡に關しては、その全責任が徽宗に負わされ、南宋の高宗については、せいぜい岳飛を殺したり、金に對して弱腰であつたりした點が責められ、しかもその大部分は宰相秦檜が肩替りして惡玉になるのが、大方の意見であつた。ところが張溥はこれに反し、徽宗が愆を窮むること三十餘年にして、天人ともに怨怒したことは事實であるが、併し更に一層の敗德者はその子高宗構であるとして、殆んどの場合に高宗と言わず、單に構と實名を以て名指して、その責任を追究している。曰く、

予れ宋史を讀み、紹興十年、觀文殿大學士、隴西の李綱薨す、というに至りて、書を廢して泣かずんば非ざるなり。曰く、王の不明なる、孰れか高宗構の如き者あらんや。

彼れ趙構なる者、金虜に逼られて、越に如き溫に如き、明に在り杭に在り、海舟に居り港口に泊し、流離して殆んど死せんとして、(詩の)營々たる青蠅(讒言)を一も悟らざるなり。唐の德宗の陸贄に於けるや、之を艱難の日に用いて、之を無事の時に棄つ。後世その極惡なるを譏る。構の李綱に於けるや、尤もこれよりも甚し。德宗は猶お母を念う。而して趙構は父を忘るに忍ぶなり。

構の性の無良なるや、幾んど夷虜に同じ。金人の愛する所、構も亦た之を愛す。金人の讐する所構も亦た之を讐とす。既に汪伯彥、黃潛善を悦べば、必ず秦檜を相とす。既に李綱、宗澤を怒れば、必ず岳飛を殺す。詩(何人斯)に云う、視たる面目(人間の外形)あり、人を視る極まりなし、と。構は則ち吾れ其の(本心の)極を知らざるなり。

史に言う、徽宗の國を失うや、愚は晉惠に非ず、暴は孫皓に非ず、篡奪するものは曹丕、司馬炎に非ず。獨り不幸にして子の厄ありたり。一たびは欽宗に敗れて明皇(玄宗)が西内の望みを絶ちしのごとく、再びは(晉の)愍帝が平陽におけるの轍を蹈みたり。むかし神龍の年に(唐の中宗が)父(高宗の後)を繼げば、(皇后韋氏と)夫婦の義喪び、のちに建炎の年に高宗が兄(欽宗)を繼げば、父子の道亡びたり。固より類を同じくして並び笑わるべきなり。

とあって、高宗を批難して完膚なからしめているが、これほど甚しい言葉で天子が誹謗されたことも他にあまり例を見ない。

そもそも中國における史論は、過去を論ずるが如く見えて、實は當時の現實になぞらえていることが多い。殊に感慨をこめて論ずる場合を然りとする。そんならば張溥は高宗を批評することによって、當時の世論に何を訴えようとしたのだろうか。

張溥が恩貢生として京師に上ったのは崇禎元年のことであり、その翌年が即ち己巳の歳で、清の太宗が北京に迫った年である。恐らく張溥は既に歸郷していたと思われるが、警を聞いて思いを曾遊の地に馳せ、感慨を新たにしたことであろう。彼の高宗論は必ずや、明清對立の時局によって激發されたものであるに違いない。そして彼の抱いた對外國政策論は

徹頭徹尾、強硬な積極主義であつた。

彼の言いたかつたことを、ある程度の推測を混えて復原するならば、恐らく次のようになるであらう。まず天子の立場は、徽宗が萬曆帝に、欽宗が熹宗天啓帝に、而して高宗が崇禎帝に比定さるべきであつたであらう。徽宗と萬曆帝とはその長い治世の間に、綱紀を頽廢せしめた責任を逃れることはできない。欽宗と熹宗とはその置かれた環境は大いに異るが、その失敗について恕すべき點があるのは共通である。欽宗は在位が短時日で且つ上皇徽宗の監視下にあつたので、一人前の天子として扱うことができぬ。熹宗は性來暗愚で年齢も若かつたので、宦官魏忠賢に壅蔽されたとしても、本氣に咎めることが出来ない。問題はその兄の後を承けた高宗と崇禎帝とである。ところで崇禎年間には一方で清朝と懸命の死闘を繰返しながら、一方では陰に和議の瀬踏みが行われていたのであつた。非業の死を遂げた袁崇煥も和平交渉に深入りしすぎ、敵を利用して朝廷を脅かしているかの嫌疑を蒙つて失敗したのである。

後世から見て不思議なことは、明清兩國の交渉において、和平に熱心であつたのは何時も清朝側であつたことである。即ち崇禎の初から七年頃に至るまで、連年滿洲國皇帝の名を以て明國皇帝に書を送つて、和議を促進すべきことを唱へざる年はない。これに對して明側から正規の國書を送つたことは一度もなく、時に邊將から休戰を提議する意味の書翰を發するに止まつた。而して明側が和議に踏みきれない最大の障害は、滿洲國皇帝が提議した明國皇帝と對等の立場において國交を行うことを認め難いという、もっぱら體面的な問題からであつた。そこで滿洲國側は、帝號を去つて汗と稱してもよい、という所まで妥協しようと言つたが、明側は遂に取りあわなかつたのであつた。最後に崇禎十五年、崇禎帝は兵部尙書、陳新甲と密議し、極祕裏に和議を進め、使者を瀋陽に派遣することまでしたのであるが、この計が外廷に漏れ、諫官等が騒ぎ出すと、天子は反つて一切の責任を陳新甲に負わせて死刑に處して體面を繕つた。大學士の周延儒も、事がこのように重大になると、後難を恐れ、敢て身を挺して救おうとはしなかつた。

崇禎十五年と言へば、張溥の死んだ翌年であり、またその翌年には周延儒、吳昌時が殺され、更にその翌年に明が滅び



ている。ところで若し張溥がもう數年長く生き延びていたなら、彼の運命はどうなったであらうか。先ず和平交渉の段階において、彼の攘夷思想は決して改まらなかつたと思われる。それは彼一人だけの問題でなく、當時の官僚政客に共通した中華獨尊思想が横溢していたからである。さればと言つて何人も、それならば飽迄も抗戦を續けてどんな結果になるかと問われれば、誰一人として成算はない。この點では萬人が等しく無責任であつたと言わざるを得ない。

後世から當時の形勢を分析して言うならば、明王朝にとって唯一の延命策は清朝と講和して内政を整えるより外に考えようはない。そうすれば滅亡後に續いた凄慘な内亂の悲劇も避けることができたであらう。併したとえそのような破滅的な結末が萬人によつて豫感されたにしても、誰一人としてそれを公言することが許されないほど、世論が硬直化したものであつたのを、我々は張溥の史論の中から讀み取ることができる。この點から言えば、張溥も亦、明を滅亡に驅りたてた立役者の一人だと言つても差支えないであらう。

次に張溥が若し生き長らえて北京陷落、清軍の南下という難局に直面したなら、どんな態度をとつたであらうか。明末の諸名士の中にはもちろん、その生平の志を貫いて、立派に難に殉じた人も多かつた。併し中には大勢に翻弄されて、豫期に違つた不名譽な生き方をして、世人に首を傾けさす者もあつた。

張溥の兄事した周介生鐘は、遅く進士に及第し、庶吉士に任ぜられて北京にあり、李自成の朝廷に仕えて晩節を汚し、自成没落後、南に逃れて福王の朝廷に出仕したが、政敵の讒言によつて死刑に處せられた。張溥の相棒である張采も榮えない死に方をした。福王の時に禮部主事から員外郎に進んだが、假を乞うて去り、南都失守のどさくさに、彼を怨む者が集つて彼を襲撃し、大錐を以て亂刺した。幸いにして彼は死んでまた甦つたが、鄰縣に逃げて匿れ、三年後に世を去つた。南京の政界は溫體仁の黨派、阮大鍼や馬士英が用いられて勢力を振つたため、復社は抵抗を試みながら志を得ず、やがて清軍が南下すると、玉石ともに焚かれて滅びたのであつた。

次に張溥の編著に係るものに、『四書註疏大全合纂』があることは注意を要する。これは清代に隆盛を極めた考證學にと

って、その一源流となるものである。そもそも明初、永樂帝の欽命によって、『四書大全』『五經大全』『性理大全』の三書が編纂されたのは、これによって儒教經典の解釋を統一し固定せんが爲であつた。少くも科擧に應ずる爲の經學は三書をマスターすればそれで十分であり完全な筈であつた。言いかえれば、それ以前の古註疏は、これによって不要に歸した筈であつた。何となれば大全は古來の注釋の粹を採つて集大成したものに外ならぬからである。然るに弘治、正徳の頃に至ると、蘇州を舞臺として藝苑に活躍した祝允明（枝山）（一四六〇—一五二六年）は、頻りに古學の復興を唱えたことが、彼の『懷星堂集』の中に見えている。卷十、學壞於宋論には、

祝子曰く、凡そ學術は盡く宋に變ぜり。變ずれば輒ち之を壞す。經業は漢儒よりして唐に訖るまで、或いは師弟子授受し、或いは朋友講習し、或いは戸を閉じて窮討す。（中略）宋人都て之を掩廢し、或いは用いて己が説を爲り、或いは稍々它人を援くことあるもそは皆な當時の黨類のみ。吾は先人に如かずとも、果して一義一理無からん乎。①（我が太祖皇帝）學者をして經を治むるに古註疏を用い、參するに後説を以いしめんとして、士従わざるなり。

とあり、中間、私に讀めない所があるが、要するに宛然たる考證學者の口調である。その卷十一、貢擧私議には科擧に註疏をも加うべきを説き、

宜しく學者をして註疏を兼習せしめ、而して宋儒より後、説を爲して附和する者は必ずしも專主せざるを便と爲す。と言ひ、卷十二、答張天賦秀才書には、

故に僕、足下に勸むらくは、宜しく十三經註疏を尋ね、之を窮むれば當に自ら得ることあらん。（中略）若し嶺外に此の篇籍なきを思えば、幸に之を力致せよ。

と言ひ、更にこの下文に、歴史は宋元十九正史を讀めと勸めている。

この祝允明の志を嗣いだのが、同じ蘇州府下に生れた張溥であつたのである。彼が『四書註疏大全合纂』三十七卷を編著したのは、宋學以後の諸説は已に大全の中に收まっているから、それ以前の古註疏をば大全と併せ讀むべきであると

し、それに便利にする爲にこのような書を、吳門寶翰樓なる書肆から刊行せしめたので、見返しに張天如先生評訂と題している。<sup>⑧</sup>この書の全體の序文はなく、最初に置かれた大學について、大學註疏大全合纂序を附し、その終に崇禎九年正月日後學婁東張溥序と署名し、西銘之印、太史氏なる二夥の印影が寫してある。張溥が大學にだけ序文をつけたのは、これが最も問題のある書なので、いわゆる大學古本を採用した理由を説明すれば、他の三書については別に言う必要がないと考えたからであろう。この序は、

古本大學は石經の文と異り、今の註疏は蓋し古本なり。論者謂えらく、漢儒の註本は詮易すべからず、と。其の言は是に近し。然るに朱子の章句は盡く其の舊を更ため、又た意を以て補亡すること少なからず。遜讓して即ち云う、其の傳は之を河南の程氏に得たり、と。

で始まり、次の文で終っている。曰く、

今の學者、補傳において其れ敢て信ぜざるは、亦た猶お是なるならん。近代の訓詁は學庸に尤も繁なり。其の説は類ね朱子に倣うと託す。抑も知る、之を言うこと彌々多くして、之を去ること彌々遠し。註疏大全に非ざれば、能く救う莫きなり。余尤も粟々たり。

張溥のこのような思想は何もこの時に急に湧き出たものではない。『復社紀事』によれば彼が崇禎元年、恩貢生として入京した時、郊廟辟雍の外觀の盛大なるを縱覽した後、喟然として太息して、

我が國家經義を以て天下の士を取ることを、三百載に垂んとす。學者宜しく微言を表章し鴻業を潤色するあるを思うべし。今公卿六藝に通ぜず、後進小生は剽耳傭目して、有司に弋獲せられんことを倖いす。怪しむなきかな、稼人柄を持し、而して枝を折り痔を舐むるもの、半ばは孔子を誦法するの徒に出づることを。他なし、詩書の道虧けて、廉恥の途塞がればなり。

と言ったとあるが、これを清朝浙東派の元祖とされる黃宗羲の言葉、

明人の講學は語錄の糟粕を襲ぎ、六經を以て根柢と爲さず。書を束ねて游談に従事し、更に流弊を滋す。故に學者は必ず先ず經を窮むべし。

とあるに比べて何と相似たことか。だから梁啓超の『清代學術概論』に、

清代の思潮は果して何物ぞや。簡単に之を言えば、則ち宋明理學に對する一大反動にして、復古を以て其の職志と爲す者なり。

と言っているのは、割引いて聞く必要がある。顧炎武、黃宗羲の主張は殆んどそのまま張溥の唱えた所であり、復社という名も、興復古學の意によって名付けられたのであった。

張溥の編著・註疏大全合纂は四書の外に『五經註疏大全合纂』があつたとされているが、その中の『詩經註疏大全合纂』三十四卷が『四庫全書總目提要』卷十七存目に著録されている。但し他の四經の存否を明にし得ない。他に提要に著録されたものは、『春秋三書』三十二卷と、『漢魏六朝一百三家集』百十八卷とであり、彼が刪正し、彼の名で通つてゐる『歷代名臣奏議』三百五十卷は、原編者の黃淮の名で載せられる。別に『七錄齋集』十六卷がある。

通觀するに彼の編著は、單なる鈔と糊で切りはぎした書物が多く、學問的な著述と言ふべきものは殆んど残っていない。彼の事業はむしろ稍々良心的な出版業と言ふべきであつて、著述業とは言えない。もちろんこの事業の中には彼が目的とする古學、古文の復興の意途が含まれてゐたには違ひないであらうが、同時に彼はこれによって相當の經濟的利益をも獲得したであらうと推察される。そして彼の出版物を賣り廣めるには、また彼の名聲が役立ったことも疑ひない。そして彼が掌握する情報網がその宣傳、時には現物の送達にも大いに利用されたのではなからうか。

世は既に情報時代に入つていたのである。情報時代には名聲が卽座に換金できる。出版監修業とも言ふべきものが可能になつてゐたからである。そして現銀はまた直ちに權力に兌換できる。官位は買ふことが出來、官府は金で動かすことができるからである。更にこの權力は益々その名聲を高めるに役立つ。

恐らくこのようにして得たであろう張溥の名聲は、併しそんなに長くは續かなかつた。世の中がすっかり變つてしまつた清朝になつて學者が張溥の業績を審査すると、意外にそれが貧弱なものであることが、一目に判つたのである。『四庫全書總目提要』の筆者は、もとより考證學に凝りかたまつた學者であるが、張溥と同じ傾向の先覺であるからと言って、その業績を批判するに阿諛する所がなかつた。

〔歷代史論〕議論凡近にして筆力尤も弱し。殊に其の名に稱わずと爲す。

〔詩經註疏大全合纂〕溥の是の書、註疏及び大全を雜取し、合纂して書を成す。科學の士の殘匿を株守する者には差々愈る。然れども亦た鈔撮の學にして、考證する所無きなり。

〔春秋三書〕（溥は）經學において、原と擅長する所に非ず。此書は未成の本たり、亦た別に奥義なし。

〔漢魏六朝一百三家集〕溥は張氏（箋）の書を以て根柢と爲して、馮氏（惟訥）梅氏（鼎祚）の書中、其の人の著作稍々多き者を取り、排比して之を附益し、以て是の集を成す。卷帙既に繁く、得るを努め多きを貪り、限斷に失するを免れず、編録も亦た往々にして法なく、考證も亦た往々にして未だ明かならず。（中略）溥は張采と、復社を唱え、聲氣蔓衍、幾んど天下に徧ねし。然れども甚しくは學派を爭わず、亦た甚しくは文柄を爭わず。故に著作皆な甚しくは多からず。溥の撰述する所、惟だ刪定名臣奏議及び此の編を巨帙と爲す。名臣奏議は去取未だ盡く允なる能わず。此編は則ち元元本本、檢核に資するに足る。溥の遺書は固と應に此を以て最と爲すべし。

とあるように、張溥の編者の中で「一百三家集」だけが及第點を與えられている。併しながら提要が既に、「人に因りて事を成す」と言っているように、張箋の書が七十二家集、三百四十七卷のものを、百三家、百八十卷と、人數を増して卷數を減したような仕事か、果してどれだけ價值あるものか。要するに資料であるならば、なまじいに刪節を加えずに、あるがままに網羅した方がよいのではないか。若し文章論をやるならば別の場所で願いたい、と我々ならば言いたい所である。だから今日の我々には嚴可均の『全上古三代漢魏六朝文』が出來た上は、張溥の一百三家集は無くもがなの書のように

に思われる。

要するに張溥の編著は、今日でも必要不可欠とされるものは何も無い。だから若し彼が學者であり、文人であったとしたらば、これは甚だ不名譽なことだ。そんなら彼の人物は全く取るに足らぬ存在で、歴史の上から無視しても構わぬ底のものなのであるうか、と言えは決してそうではない。政治史の上で、若し張溥を抜かして明末を語ろうとすれば、そこに大きな穴があく。考證學の發達を語るにも、若しそれを明の祝枝山のあたりから説き起こそうとすれば、どうしても次に張溥で受けなければならぬ。むしろ張溥の地ならしがあつたればこそ、いわゆる清朝の考證學はだしぬけに清初から、殆んど成人のような顔をして誕生することができたのではなかるうか。張溥の存在は、傳統的な固定概念で捉えるべきではない。彼は本質的には今日いう所のジャーナリストであつたと考えるのが一番適當であろう。私は先に明末は既に情報社會であると言つたが、その情報社會へ、恐らく最初のジャーナリストとして登場したのが張溥であつたと言え一番それがびたりとする。彼は來客を前にして、下書きなしで文を草したという程の早書きであつたと言うが、それがジャーナリズムの文章であつたとすれば合點が行く。もしそんな文章が全部残つていて、それを集めれば面白い文集ができるであろうし、また色々な意味で有益であろうが、但しそれは恐らく、いわゆる文章家の文章とは随分毛色の變つたものであるに違いない。それは文章として後世に残ることを目的としたものでなく、何らかの意味において切實な現世の目的を捉えてそれを解決するに役立てる事務的な文章だつたからである。彼が反權力闘争に従事しながら、自身はひとときわ權力慾が強かつたことも、彼がジャーナリストであることを思えば、何よりも自然に理解が行くであろう。彼の身は單なる里居の一庶吉士でありながら、遙かに朝政を執る、と稱せられたのも、現時のジャーナリストが無冠の宰相などと稱せられることもあるのに比べて甚だ興趣深い。彼の生涯はジャーナリスト的生涯であり、彼の事業はジャーナリスト的事業であつた。だから後世に何物をも残すまいとすれば、残さずにすんだ。それで彼は別に悔いることはなかつたのである。

張溥の生涯について小論を物したいことは私にとって長年の懸案であった。彼の存在は明末の政局を解明する爲に重大な意義を有することを前から考えていたからである。それを今まで怠ってきたのは、彼の全文章に目をおすことが出来ないからであった。普通にある文化人の傳記に取組むためには、先ずその全集に目を通すのが常道である。若し全體を精讀することができなくても、少くもこういうことは書いてないということを確めないと安心できないからである。然るに今度「東洋史研究」編集委員から、郷紳特集號にと執筆を求められたので、若しこの期を失すると、何時再びその機會が訪れるか知れないことを思い、勉強不足を承知の上で取りかかった。ところが考察を進めて行く間に、張溥の場合には全作品を精査するにも及ばないと思うようになった。彼の文章には應酬の文が多い。そうでなければ李鴻章の全集のように事務的なものが多く、曾國藩の全集のようなものにはなり得ない。それは史料にはなり得ても、精神生活や學問の奥行を示す役にはあまり立たない。更にこの時代の社會情勢を検討して行くと、初は如何にも不自然なことのようになつた。これが私にとって期待とは異つた收穫であつた。たことが、そのままでも別におかしくないと感じられるようになった。これが私にとって題目には寧ろこの方が適當であるとまた私論文の體裁が普通とは少し變つてゐることは自ら自覺しているが、このような題目には寧ろこの方が適當であるとまた私なりに考えるのである。<sup>②</sup>

## 註

① 張溥がはつきり郷紳とよばれた例。復社紀略卷二に、周之夔が張溥、張采、劉士斗を彈劾した記事を載せ、「之夔遂坐溥采、悖違祖制、紊亂漕規、指士斗、爲行媚鄉紳」とあり、卷四には同じことを、張國維回奏中の語として、獻媚鄉紳、と言いかえてゐる。

② 張溥著書の卷數。明史卷二百八十八、彼の傳に、三千餘卷とあるが、吳偉業の復社紀事には、「先生所纂、五經疏大全、及

禮書樂書、名臣奏議數百卷、繕書進覽」とあり、天子に進呈したのが數百卷であつたのか、全部で數百卷であつたのか明かない。

③ 明末と後漢末と。明末の復社の活動は後漢末のいわゆる處士橫議を連想させる。もし明末の復社活動がその情報網を背景としたならば、後漢末も同様ではなかっただろうか。後漢末の情報網は恐らく口コミによって、口から耳へと傳達されたであらう。

う。その際傳えられた謠、汝南太守范滂、或いは天下模楷李元禮などの句は、今日で言えれば新聞記事の見出しに當る。少くも人名を取違えてはならぬ配慮がなされ、各句について註疏が附されて事實が演繹されたに違いない。

④ 明末政府の歳出入數に關する黃承昊の上疏は、明史紀事本末卷七二、崇禎治亂の條にも見え、この方が萬以下の細數をも記しているが、細數は必要がないので、實錄の文を出した。但し紀事本末によって補った點がある。

⑤ 韓一良の疏は、崇禎實錄卷一にも見える。括弧の中は實錄によって補った部分である。

⑥ 陳新甲の死。崇禎實錄卷十五、崇禎十五年九月戊子の條に、「誅前兵部尚書陳新甲、初周延儒入其賄、營解甚力、因奏、國法大司馬、兵不臨城、不斬、上曰、他邊疆卽勿論、僇辱我親藩七焉、不甚于薄城乎、延儒語塞、既而刑部署事右侍郎徐石麒奏、其釀寇私歛、(立奏?)上竟棄市」とあって周延儒が陳新甲を庇ったことは他書の記載も同じ。然るに卷十六、崇禎十六年

十二月乙丑の條に、彼が死を賜わったことを記した後に、「及再相、反溫(體仁)所爲、而嗜利無厭、往往鬻爵、時方得君、不顧外患、歟局敗、委罪陳新甲、沒其厚賂、欺蔽明主、敗壞國事、遂以亡天下」とあるのは前と矛盾する。恐らく最後の所は、周延儒と言い乍ら、實は崇禎帝のことを述べたのであらう。以亡天下の四字の言葉がそのことを暗示しているようである。

⑦ 祝允明の原文は、「吾不如果無君子一義一理乎、」とあり、どうも讀めないで、君子の二字を、果の上へ出して讀んでみたが、これでもまだ十分には落付かない。

⑧ 張溥の四書註疏大全合纂については、拙稿、四書考證學(アジア史研究第四)参照。

⑨ この小論と共通する題目を取扱ったものに小野和子「明末の結社に關する一考察——とくに復社について——」(史林第四五卷第二、三號)があるので、なるべく記述重複を避けた。



## Zhang Pu 張溥 and Social Conditions at the End of the Ming 明 Period

*Ichisada Miyazaki*

The Fu-she 復社 organized by Zhang Pu was a nationwide club of literary figures which gradually took on the character of a political movement and has been described as an offshoot of the Dong-lin party 東林黨. Late Ming China was already an "information society"; the Fu-she established branch chapters at the county 縣 level, and the heads of the chapters collected and disseminated political information. In this connection not only local authorities but also high officials of the central government formed links with the Fu-she and attempted to make use of it. As the faction of the Grand Secretary Wen Ti-ren 溫體仁 hated the Fu-she and attempted to carry out a purge against it, the latter responded to this threat by supporting the former Grand Secretary Zhou Yan-ru 周延儒 and succeeded in restoring him to power. But Zhang Pu died immediately afterwards and before long the Ming was extinguished.

Zhang Pu advocated "the revival of ancient learning" 古學復興, and was one of the inspirers of Qing critical scholarship 考證學, but he himself was no creative scholar and has left behind only a large number of compilations and collections.

## The Yi-zhuang Households 寄莊戶 in the Ming Period

*Mamoru Kawakatsu*

During the Ming landholding outside the prefecture or county where one was registered (or, at a finer level of distinction a *bie-du*